伊勢遺跡確認調査報告書V

守山市文化財調査報告書

平成19(2007)年3月 滋賀県守山市教育委員会

序 文

守山市が所在する湖南地域は、古くから交通の要衝として発達を遂げてきました。市内には 中山道が通過し、草津からは志那街道や琵琶湖を介した交流の結節点として、重要な役割を担っ ていたことが窺われます。近年では工場の誘致や店舗建築などによって地元に産業が定着し、共 同住宅の建築や大規模な宅地開発が行われ、人口が確実に増加しており、急速に農村から都市 へと変化しようとしています。

開発に伴う遺跡調査によって多数の遺跡が発見され、私たちの祖先の暮らしぶりが明らかになってきました。守山市内でも全国的に見て、重要な服部遺跡や下之郷遺跡、下長遺跡などが次々と発見されました。本報告書の伊勢遺跡は弥生時代後期のクニの中心と考えられる遺跡で、全国的にも注目される貴重な遺跡です。

経済的な豊かさや利便性を追求する一方で、私たちは子孫に対して豊かな自然や文化遺産を伝えていく責務があります。自然環境も文化財も一度失ってしまえば取り返すことができない点で共通していることから、新しいものと古き良きものが共存する豊かなまちづくりを目指したいと思います。

最後になりましたが、伊勢遺跡の調査に携わって頂いた方々、協力頂いた地権者並びに地元、 の方々にお礼申し上げるとともに、今後とも本市の文化財保護行政に御理解・協力頂きますよ うお願いいたします。

> 平成 19年3月 守山市教育委員会 教育長 山川芳志郎

例言

- 1. 本書は、平成 15・16・17 年度に実施した伊勢遺跡の範囲確認調査報告書である。調査は国宝重要文化財等保存整備費補助金を得て実施した。整理業務は平成 18 年度国宝重要文化財等保存整備費補助金を得て実施した。
- 2. 本調査は、守山市伊勢町字中東浦62番地他の水田地で行った。
- 3. 本調査は、守山市教育委員会(教育長 山川芳志郎)が実施した。
- 4. 確認調査は平成 15 年 11 月 23 日から平成 18 年 1 月 25 日の期間で現地調査を実施した。なお、調査整理業務は平成 18 年 4 月 15 日より平成 19 年 3 月 31 日まで実施した。
- 5. 発掘調査・整理調査業務にかかる教育委員会事務局は以下の体制で実施した。

平成 15 年度確認調查 平成 16 年度確認調查 平成 17 年度確認調查 平成 18 年度整理調查教育 長山川芳志郎 教育 長山川芳志郎 教育 長山川芳志郎 教育 長山川芳志郎 教育 段山川芳志郎 教育 形長津田 重幸 教育 部長津田 重幸 教育 部長 井上 純作教育 次長 宇野勘一郎 教育 次長 宇野勘一郎 教育 次長 森 俊晴 教育 次長 石田 典明文化財保護課長山崎 秀二 文化財保護課長山崎 秀二 文化財保護課長山崎 秀二 文化財保護課長山崎 秀二 文化財保護課長山崎 秀二 文化財保護課長 山崎 秀二 文化財保護課長 山崎 秀二 文化財保護課長 山崎 秀二 文化財保護課長 山崎 秀二 文化財保護課券事 岩崎 茂調査担当者 伴野 幸一 調查担当者 伴野 幸一

- 7. 発掘調査・整理業務及び本報告書作成については伴野が担当した。
- 8. 本報告書では標高は東京湾ポイントを使用し北方位は日本平面国家座標六系のX座標を指す。
- 9. 本調査にかかる遺物・図面・写真資料は、市立埋蔵文化財センターに保管している。

伊勢遺跡重要遺跡確認調査調査報告書 V 目 次

 目
 次

 挿図目次図版目次

第1章	確認調查	をに至る経緯と伊勢遺跡の歴史的環境········1	
	第1節	確認調査に至る経緯1	
	第2節	伊勢遺跡の歴史的環境1	
	第3節	伊勢遺跡既往調査3	;
第2章	伊勢遺跡	亦の調査成果7	,
	第1節	第92次調査の成果7	,
	第2節	第94次調査の成果16	ô
	第3節	第96次調査の成果	3
	第4節	第97次調査の成果21	l
	第5節	第98次調査の成果23	3
	第6節	第99次調査の成果25	5
			,
第3章	伊勢遺跡	s北東部の区画施設について29	9

挿 図 目 次

挿図1	野洲川流域の遺跡分布図	挿図 15	伊勢遺跡 96 次調査出土遺物
挿図2	伊勢遺跡全体図	挿図 16	伊勢遺跡 97 次調査位置図
挿図3	伊勢遺跡 92 次調査位置図	挿図 17	伊勢遺跡 97 次調査全体図
挿図4	伊勢遺跡 92 次調査T-1平面図・断面図	挿図 18	伊勢遺跡 98 次調査位置図
挿図5	伊勢遺跡 92 次調査全体図	挿図 19	伊勢遺跡 98 次調査全体図
挿図6	伊勢遺跡 92 次調査T-2全体図	挿図 20	伊勢遺跡 98 次調査SD-1 断面図
挿図7	SK- 1 · 2、SX- 2 遺物出土状況		
挿図8	伊勢遺跡 92 次調査出土遺物	挿図 21	伊勢遺跡 99 次調査位置図
挿図9	伊勢遺跡 92 次調査出土銅銭実測図	挿図 22	伊勢遺跡 99 次調査全体図
挿図 10	伊勢遺跡 94 次調査位置図	挿図 23	伊勢遺跡 99 次調査SH-1平面図
挿図 11	伊勢遺跡 94 次調査全体図	挿図 24	伊勢遺跡 99 次調査出土遺物
挿図 12	伊勢遺跡 96 次調査位置図	挿図 25	伊勢遺跡 96·98 次調査全体図
挿図 13	伊勢遺跡 96 次調査区画溝断面図	挿図 26	伊勢遺跡北東部の区画溝
挿図 14	伊勢遺跡 96 次調査全体図	挿図 27	伊勢遺跡全体図

図 版 目 次

		J2	<u> </u>	///		> \						
図版 1	伊勢遺跡 92 次	て調査 (上)	T-1	遺構検出状況	(西から)	(下)	T-1 遺	構検出り	弋況 (東	 (から)	
図版2	伊勢遺跡 92 次	大調査 (上)	T-1	SH-1 検出状泡	兄(西か	5)	(下)	T-2 遺	構検出状	況(南	東から)	
図版3	伊勢遺跡 92 み	で調査 (上)	T-2	SX-1 検出状泡	兄(南か	ら)	(下)	T-2	SX-1 断面	ῗ(南か	ら)	
図版4	伊勢遺跡 92 次	大調査 (上)	T-3	北側遺構検出	犬況 (南	東から)	(下)	T-3 S	H-2 検出	状況(ī	西から)	
図版5	伊勢遺跡 92 次	ヾ調査 (上)	T-3	遺構検出状況	(西から)	(下)	T-3 遺	構検出状	沈(北	から)	
図版 6	伊勢遺跡 92 次	大調査 (上)	SX-2	2 遺物出土状況	(東かり	ら)	(下)	SX-2 i	物出土	状況()	東から)	
図版7	伊勢遺跡 92 次	て調査 (上)	T-3	遺構検出状況	(南東か	ら)	(下)	T-3 遺	構検出状	況(東	〔から)	
図版8	伊勢遺跡 92 次	て調査 (上)	T-3	北壁拡張(西z	から)		(下)	T-3 調	查風景	東から	,)	
図版 9	伊勢遺跡 94 次	ヾ調査 (上)	T-1	検出状況(南頭	東から)		(下)	T-2 検	出状況	(南東か	ら)	
図版 10	伊勢遺跡 96 次	(調査 (上)	SD-1	検出状況(北	から)		(下)	遺構検	出状況	(北西カ	15)	
図版 11	伊勢遺跡 96 次	に調査 (上)	SH-1	検出状況 (北	から)		(下)	SH-1 4	全景 (北:	から)		
図版 12	伊勢遺跡 96 次	(調査 (上)	遺構	検出状況 (西:	から)		(下)	SD-1 #	屈削状況	(東か	ら)	
図版 13	伊勢遺跡 97 次	に調査 (上)	調査	前風景(西か	ら)		(下)	T-1 遺標	構検出状	況(北)	東から)	
図版 14	伊勢遺跡 97 次	(上)	T-2	検出状況 (南耳	収から)		(下)	T-2 検	出状況	(南西カ	ら)	
図版 15	伊勢遺跡 98 次	に調査 (上)	T-1:	遺構検出状況	(北西か	5)	(下)	T-1 S	SH-1 検出	出状 (西	から)	
図版 16	伊勢遺跡 98 次	に調査 (上)	T-2	遺構検出状況	(南から)	(下)	T-2 遺	構検出状	況(北)	西から)	
図版 17	伊勢遺跡 98 次	に調査 (上)	T-2:	遺構検出状況	(北西か	5)	(下)	SD-1	所面状況	(北か	ら)	
図版 18	伊勢遺跡 99 次	く 調査 (上)	T-1:	遺構検出状況	(北東か	ら)	(下)	T-1 遺	構検出状	況(東	(から)	
図版 19	伊勢遺跡 99 次	ヾ調査 (上)	T-2:	遺構検出状況	(北東か	ら)	(下)	T-2 遺	構検出状	況(東	〔から)	
図版 20	伊勢遺跡 99 次	r調査 (上)	T-2	遺構検出状況	(南から)	(下)	SH-1 相	食出状況	(北か	ら)	
	ten the veneral const											

- 図版 21 伊勢遺跡 92 次調査出土遺物写真
- 図版 22 伊勢遺跡 92 次調査出土遺物写真
- 図版 23 伊勢遺跡 92 次調査出土遺物写真
- 因从20 万分起奶 20 代阿里田工运物子类
- 図版 24 伊勢遺跡 96・99 次調査出土遺物写真
- 図版 25 伊勢遺跡 92・96・99 次調査出土遺物写真
- 図版 26 伊勢遺跡 92 次調査出土銅銭写真

第1章 確認調査に至る経過と伊勢遺跡の歴史的環境

第1節 確認調査に至る経緯

伊勢遺跡は昭和54年、個人住宅の建築に先立つ試掘調査によって発見された弥生時代後期を中心に発達する集落遺跡である。平成18年3月現在までに99次にわたる調査が行われ、縄文時代後期から室町時代にかけて営まれた遺跡であることがわかった。縄文時代後期には石囲炉をもつ竪穴住居や土壙が発見されているほか、旧河道には縄文晩期から弥生時代前期の土器が出土しており、周辺部に古くから人々が居住していたことが推定される。さらに弥生時代中期には竪穴住居が少数ながら発見されているほか、本報告でも環状石斧が出土しており、小規模な集落が存在したとみられる。しかし、本格的には弥生時代後期に巨大化しており、遺跡全体に遺構が分布している。

伊勢遺跡では、平成4年に弥生時代後期としては全国最大級の大型掘立柱建物SB-1が発見された。この大型建物は栗東市下鈎遺跡とともに、近畿地方の弥生遺跡にも大型建物が存在することが初めて明らかとなり、学史的にも重要な位置をしめている。伊勢遺跡では道路建設や宅地造成によって、平成5年から平成8年にかけて新たに5棟の独立棟持柱あるいは屋内に棟持柱をもつ大型掘立柱建物が次々と発見され、特異な内容と歴史的意義をもつ遺跡であることが一層明らかとなっていった。

守山市では平成9年度から、開発が迫る伊勢遺跡中心部の確認調査を開始し、遺跡の性格や広がりを事前に把握することに努めた。確認調査によって、平成10年には独立棟持柱付き大型建物SB-5、楼観と見られる3間×3間の総柱式建物SB-10の存在が明らかになったほか、平成11年には中心部の大型建物SB-1は2棟の建物が重複していることがわかった。さらに平成13年には大洲地区で独立棟持柱付き大型建物SB-12が発見された。以上の調査成果から棟持柱をもつ大型建物が弧状に配置されていることが推定された。さらに、平成14年には弧状に並ぶ大型建物の外側に床面積が185㎡を越す大型竪穴建物が発見された。この建物の床や壁にはレンガ状に焼いた遺構がみられ、特異な施設をもつことが判明した。このような確認調査の成果から、伊勢遺跡は紀元2世紀を中心とする「国」の中枢機能をもつ遺跡と考えられ、政治・祭祀を執り行う施設がこのような大型建物であったと推定される。

調査にあたっては地元伊勢町・阿村町の地権者の了解を受け、平面検出を基本とし遺跡の広がりや性格の把握に努めた。遺構の時期決定や性格を掴む上で必要と判断される場合、文化庁及び滋賀県教育委員会文化財保護課と協議のうえ、最小限の掘削調査を行った。調査終了後は、重機及び人力によって埋め戻し原状復帰に努めた。また、開発によって地下遺構が傷まないように保存について協議をおこなった。

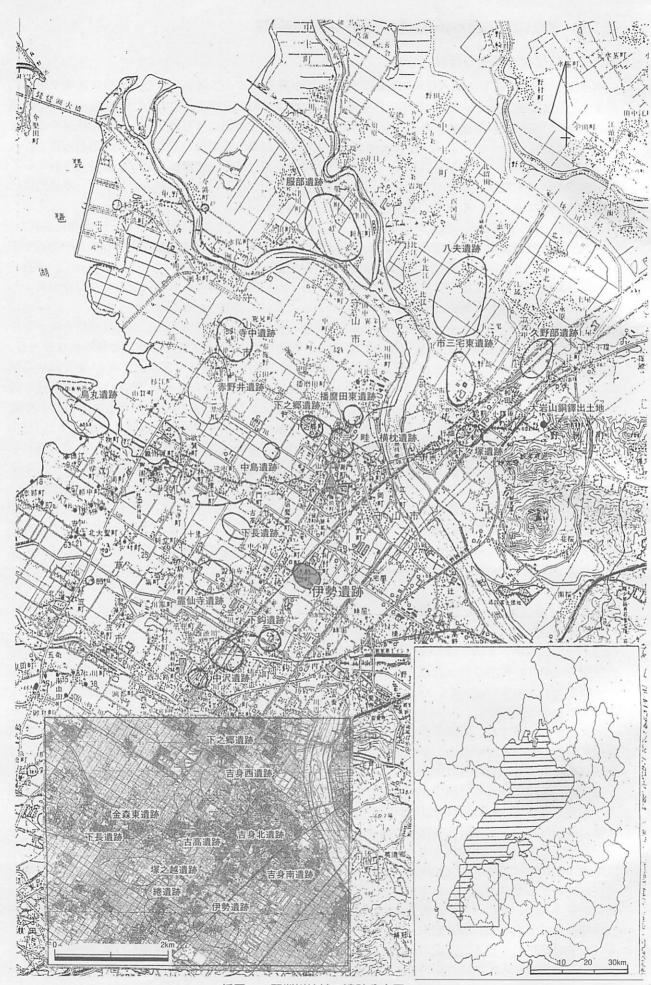
第2節 伊勢遺跡の歴史的環境

伊勢遺跡は琵琶湖東南部の湖南平野を見下ろす標高 98 m前後を測る扇状地上に営まれている。遺跡 周辺の千代北遺跡、下長遺跡、塚之越遺跡、経田遺跡などでは縄文時代中期末から後・晩期にかけて竪 穴住居や土壙等が検出され、石器や土器が出土している。伊勢遺跡でも縄文時代後期から晩期の石囲炉 や土壙が見つかっているほか、石器や土器が出土しており、古くから人が住み狩猟や漁労などの活動を 行っていたことがわかる。

滋賀県南部地域では、服部遺跡のように湖岸近くの自然堤防上で弥生時代前期の集落が営まれ、大規模な水田が造営されていたことがわかっている。野洲川の支流沿いや琵琶湖沿岸の低地を利用して、農耕が営まれるようになったと考えられる。

弥生時代中期になると野洲川が形成した扇状地端に下之郷遺跡や二ノ畦・横枕遺跡など巨大な環濠集落が出現している。中期末には山田町遺跡や栗東市下鈎遺跡でも扇状地末端に集落遺跡が出現しており、次第に内陸部に向かって居住空間がひろがっていたことがわかる。伊勢遺跡でも中期後半の土器が少量ながら出土しており、小規模ながら弥生時代中期に集落が営まれていたと考えられる。

野洲川左岸地域では弥生時代後期初頭には中期の大規模な集落遺跡が衰退し、後期初頭には小規模な 集落が散在する景観が復元される。このような散村傾向は弥生時代後期から古墳時代前期にかけて一般 的に存続するが、その一方で伊勢遺跡や下長遺跡のように核となる遺跡が発達を遂げている。伊勢遺跡 は後期中葉に発達しはじめ後期末には衰退へと向かう。下長遺跡は古墳時代初頭から古墳時代前期末に かけて大規模化している。多数の散在する小集落と、大規模化する特異な内容をもつ集落が併存するの が弥生時代後期から古墳時代前期末の集落景観の特質とみられる。伊勢遺跡は二世紀を中心に特異な発 達をとげる集落遺跡で、邪馬台国時代前夜の「クニ」の政治・祭祀を執り行う中枢部と考えられる。



挿図1 野洲川流域の遺跡分布図

第3節 伊勢遺跡既往調査

伊勢遺跡は昭和56年に発見されて以来、平成18年3月末までに99次に及ぶ調査を行っている。本報告では92・94・96・97・98・99次の確認調査の成果を収録している。本書に収録した調査は、範囲確認調査および、共同住宅並びに分譲住宅などの民間開発に先立つ確認調査によるものである。現地調査は遺構検出を基本とし、調査終了後は保護層を設け、開発によって傷まないように設計変更等の協議を行い、保存の協力を依頼した。

調査次数	所在地	関査期間	調査原因	面積	参考文献	調査概要
1次	伊勢町字中東浦 75	昭和 56 年 1 月 16 日~ 昭和 56 年 1 月 22 日迄	個人住宅	約 50㎡	乙貞1号	試掘により弥生後期の遺跡の存在を確認。 柱穴・溝(方形周溝墓か)
2次	伊勢町字中東浦 76・77・82-1	昭和 56 年 4 月 13 日~ 昭和 56 年 7 月 10 日迄	宅地造成	約 3,000㎡	滋賀文化財だより 67 号 乙貞4・5 号	弥生後期の竪穴住居9棟検出。内1棟は五角形住居。 相の検出。 数倉時代の堀立柱建物・井戸等検出。
3 X	伊勢町字大苗代 309-9·311-1	昭和 56 年 7 月 10 日~ 昭和 56 年 9 月 30 日迄	宅地造成	約 3,000㎡	乙貞5号	弥生後期の竪穴住居 10 棟検出。内 1 棟は五角形住居。古 墳時代初頭から前期にかけての方形周溝墓 8 基を検出。
4次	伊勢町字二丁田 344· 343	昭和57年4月12日~ 昭和57年4月26日迄	農業倉庫	約 400㎡ /580㎡	守文報第 12 冊 乙貞 6.7	弥生後期の五角形住居 1 棟。平安後期の溝・土壙・柱列・ 井戸等を検出。五角形住居から弥生後期の土器群が出土。
5次	伊勢町字西浦 537	昭和 57 年 5 月	個人住宅	約 100㎡	守文報第 12 冊	弥生後期の溝。
6次	伊勢町 451-1 他二町町 30-1	昭和58年9月 2日~ 昭和58年9月30日迄	宅地造成	約 2,000㎡	守文報第 15 冊	奈良時代の掘立柱建物1棟・溝を検出。
7次	伊勢町 451-8 二町町 30-1	昭和59年5月30日~ 昭和59年6月17日迄	宅地造成	約 1,000㎡	守文報第 15 冊	奈良時代の掘立柱建物 1 棟・溝を検出。
8次	伊 努 町字西浦 537·538	昭和59年11月9日~ 昭和59年11月30日迄	個人住宅	70㎡ ∕ 174㎡	守文報第 20 冊	
9次	阿村町字下番田 151-3	昭和 59 年 4 月 5 日	资材置き 場	約 300㎡ /476㎡		旧河道
10 次	伊勢町字二丁田 327-3	昭和59年11月10日~ 昭和59年12月1日迄	個人住宅	約 700㎡ /1,269㎡	守文報第 20 冊	弥生後期の竪穴住居 1 棟検出。奈良・平安時代の掘 建柱建物・溝、鎌倉時代の建物・井戸
11 次	伊勢町字西浦 540	昭和59年12月10日~ 昭和59年12月14日迄	個人住宅	200m²	守文報第 26 冊	游(しがらみ遺樽)
12次	伊勢町字伊勢里 177-1	昭和63年12月19日~ 昭和63年12月26日迄	農業倉庫	405m²	守文報第 33 冊	溝4条、土壙6基、柱穴、中世とみられる。
13 次	伊勢町字大苗代 303-12	平成元年1月13日~ 平成元年2月8日迄	個人住宅·	300m²	守文報第33冊 乙貞43号	古墳時代初頭の方形周滯慕2基、 溝・柱穴 奈良時代(8世紀前半)
14 次	伊勢町字上阿ノ図 19-1 外4年	平成2年4月20日~ 平成2年6月4日迄	宅地造成	2,000㎡ /1,2464㎡	乙貞 51 号	古墳時代・鎌倉時代の溝、奈良時代の溝2条。 江戸時代の井戸。
15 次	伊勢町字伊勢里 322-3	平成2年12月13日~ 平成2年12月14日迄	個人住宅	60 ㎡ ∕149㎡	守文報第 43 冊	弥生後期から古墳後期の遺物包含層。 鎌倉時代の柱穴
16 次	伊勢町字二丁田 347-1	平成2年2月4日~ 平成2年2月23日迄	個人住宅	978m	守文報第 43 冊	鎌倉時代の掘建柱建物・溝・土壙
17次	伊勢町二丁田	平成2年 2月~ 平成2年4月	宅地造成	450㎡	乙貞 55 号	鎌倉時代の溝・掘建柱建物 6 棟、土壙 7 基 江戸時代の井戸
18 次	伊勢町字中東浦 81-1	平成2年6月28日~ 平成2年8月8日迄	介庫建設	888m²	守文報第42冊 乙貞51号	弥生後期の竪穴住居 9 棟・游・独立棟持柱付強物。 鎌倉時代の掘立柱建物・旧河道
19 次	伊勢町字井上 125	平成4年1月28日~ 平成4年1月30日迄	個人住宅	330m	守文報第44冊 乙貞61号	弥生後期末の竪穴住居・方形周滯墓・滯。 縄文晩期の深鉢・石鏃
20 次	伊勢町字大将軍 513-1・ 513-2	平成4年6月8日~ 平成4年6月10日迄	倉 庫建設	約 100㎡ /948㎡	乙貞63号	弥生後期の竪穴住居 1 棟(五角形住居か) 旧河道
21 X	伊勢町字中東浦 80	平成4年6月25日~ 平成4年9月25日迄	倉庫建設	870m²	現 説 資 料 92.9.19 乙 貞 64 · 65 伊勢遺跡確認調査 報告費 2003·3	弥生後期の大型建物 3 棟(SB-1・2・3)竪穴 住居 7 棟・柱穴多数。 鎌倉時代の堀立柱建物 4 棟
22 次	伊勢町字高関 459	平成4年7月29日~ 平成4年9月5日迄	共同住宅	600nf	守文報第 48 冊 乙貞 64 号	弥生後期の方形周溝墓3基。 古墳時代後期から平安時代の溝。
23 X	伊勢町字西浦 553	平成4年9月1日~ 平成4年9月15日迄	個人住宅	227 m²	守文報第 47 冊	弥生後期の自然流路(土器出土)。
24 次	伊勢町字溝崎 411-1 412-1	平成5年4月23日~ 平成5年6月30日迄	共同住宅	2,279m²	乙貞 69 号	鎌倉時代の掘立柱建物・滯。
25 次	伊勢町字大苗代 308-2	平成5年5月15日~ 平成5年5月29日迄	個人住宅	240 m² /500m²	守文報第53冊 乙貞69号	弥生後期の大 溝。 古墳時代前期の方形周溝墓1基。
26 次	伊勢町字溝崎 409	平成5年6月7日~ 平成5年6月12日迄	共同住宅	1,292m / 1,308m	乙貞 69 号	耕作跡
27 次	伊勢町字伊勢里 323-3	平成5年9月21日~ 平成5年10月15日迄	共同住宅	500㎡ /998㎡	乙貞 71 号	弥生後期の竪穴住居2棟・土壙6基。
28 次	伊勢町字南東浦 84-1 他	平成5年10月26日~ 平成7年5月31日迄	区画整理	10,000m²	乙貞 72.73.74.75 号 守文報第 63 冊	弥生後期の大型建物・区画海・方形周溝墓。 鎌倉時代の掘立柱建物・区画溝
29 次	伊勢町字西浦 531 他	平成5年10月 ~平成6年1月	公共下水	606m²	乙貞 73 号表	
30 次	伊勢町字高崎 460	平成6年5月23日~ 平成6年5月27日迄	共同住宅	400m²	乙貞 79 表	弥生中期の方形周禕墓。
31 次	伊勢町字伊勢里 322	平成7年1月24日~ 平成7年2月17日迄	公共下水	200m²	乙貞 85 号表	弥生後期から鎌倉。

※参考文献の守文報は「守山市文化財調査報告告」を示す。

饲査次数	所在地	調査期間	調査原因	面積	参考文献	四空概要
32 次	伊勢町字伊勢里 257	平成7年9月15日	個人住宅	396 m²	守文報第61冊	井戸(近世)
33 次	伊勢町字大苗代 302 304-7	平成7年12月20日~ 平成8年1月31日迄	共同住宅	500㎡ /1,312.9㎡	乙貞84号	柳文時代の土壙・柱穴。
34 次	伊勢町字伊勢里 525	平成8年3月4日~ 平成8年3月22日迄	個人住宅	346m²	乙貞 85 号 守文報第 61 冊	鎌倉時代の掘立柱建物・溝・土壌
35 次	二町町字北上代7-5-9-2	平成8年7月22日~ 平成8年8月26日迄	宅地造成	336m² /2,094 m²	乙貞 88 号	弥生後期の方形周澣幕・竪穴住居。
36 次	伊勢町字大将軍 516-1	平成8年11月13日~ 平成8年11月26日迄	個人住宅	120㎡ / 218 ㎡	乙貞 90 号 守文報第61 册 1997.3	弥生後期の周壁溝が巡る五角形住居。中世の溝。
37 X	伊勢町字西浦 520·521	平成8年11月13日~ 平成8年11月21日迄	共同住宅	117㎡ / 368 ㎡	乙貞90号	溝3条・土壙2基・柱穴。
38 次	伊勢町字南代 104	平成8年11月20日~ 平成8年12月7日迄	共同住宅	117㎡ / 316 ㎡	乙貞90号	溝5条·土壙1盐。
39 次	伊勢町字伊勢里	平成9年1月31日~ 平成9年2月14日迄	個人住宅	80ml /368ml	乙貞 91 号 守文報第66 册 1998.3	溝3条・土壙2基・柱穴。
40 次	伊勢町字南代3街区9	平成9年4月24日~ 平成9年6月13日迄	共同住宅	323㎡ /1,148 ㎡	乙貞 93 号	旧河道。
41 次	伊勢町字西浦 548-2	平成9年5月16日	個人住宅	25m²	守文報第 66 冊 1998.3	中世の土壙。
42 次	伊勢町字西浦 548-1	平成9年6月26日	個人住宅	25m²	守文報第 66 冊 1998.3	古墳時代前期の溝。中世の土壙。
43 次	伊勢町字南代 14 街区 4	平成9年8月4日~ 平成9年8月26日迄	個人住宅	374ml /745ml	乙貞 94 号 守文報第66 日 1998.3	坦立柱建物 4 棟、中世の井戸 1 基。
44 次	伊勢町字南代 14 街区 7	平成9年10月8日~ 平成9年11月6日迄	共同住宅	220ml /768ml	乙貞 95 号	弥生竪穴住居 1 棟・独立棟持柱付大型建物(SB-4)・土壙 2 基・柱穴多数。中世の溝。
45 次	伊勢町字伊勢里 10 街 区 4	平成9年11月22日~ 平成9年12月24日迄	個人住宅	433㎡ /500㎡	乙貞 96 号 守文報第66 日 1998.3	弥生濟 1 条。中世区画濟·堀立柱建物 1 棟、井戸 1 基柱穴多数
46 次	伊勢町字中東渝 80	平成 10年1月22日~ 平成 10年3月4日迄	確認調査	100m²	乙貞 97 号 伊勢遺跡確認調査 報告費 2003.3	弥生後期の竪穴住居7棟・柱穴多数・土壙。
47 次	伊勢町字稗田 396	平成 10 年 3 月 13 日~ 平成 10 年 3 月 14 日迄	宅地造成	60㎡ /2,200 ㎡	乙貞 97 号	溝1条、古墳時代後期柱穴1個。
48 X	伊勢町宇南東浦 91	平成 10 年 5 月 21 日~ 平成 10 年 6 月 19 日迄	確認餌査	150m²	乙貞 99 号 現説資料 98.6.14 伊勢遺跡確認調査 報告費 2003.3	独立棟持柱付大型延物 1 棟(SB-5)柱根 2出土・ 柱穴多数。中世の海 1 条。
49 次	阿村町字上番田 143-1	平成 10 年 9 月 16 日~ 平成 10 年 10 月 23 日	工場建設	1,856nf	伊勢遺跡確認調査 報告費 2003.3	竪穴住居・溝。
50 X	伊勢町字南東浦 92・93	平成 10 年 10 月 12 日~ 平成 10 年 11 月 12 日迄	共同住宅	800㎡ /1,246 ㎡	伊勢遺跡確認調査 報告費 2003.3	溝・土壙・柱穴。 中世の掘立柱建物群。
51 次	伊勢町字中東浦 79-1	平成 10 年 11 月 2 日~ 平成 10 年 11 月 20 日	確認調査	500m²	伊勢遺跡確認調査 報告費 2003.3	弥生後期の旧河道。
52 次	阿村町 156	平成 10 年 11 月 20 日~ 平成 10 年 12 月 25 日迄	確認調査	500m²	乙貞 102 号 現説資料 98.12 伊勢道跡確認調査 報告費 2003.3	竪穴住居5棟・大型建物(SB-10)・溝・柱穴。
53 次	阿村町 157-1	平成 10年 12月 4日~ 平成 10年 12月 18日迄	確認調査	500m²	乙貞 102号 伊勢遺跡確認調査 報告費 2003.3	竪穴住居2棟・柱穴・溝。
54 次	- 伊勢町字南代 589	平成 11 年 2 月 8 日~ 平成 11 年 2 月 18 日迄	共同住宅	500m²	乙貞 103号 伊勢遺跡確認調査 報告費 2003.3	竪穴住居 1 棟・溝・柱穴。
55 次	伊勢町宇南代 254	平成 11 年 5 月 13 日~ 平成 11 年 5 月 17 日迄	共同住宅	200m²	乙貞 109 号表	旧河道。
56 次	伊努叮宇中東浦 78	平成11年5月10日~ 平成11年7月8日迄	確認調査	800ml	乙貞 105 号 現説資料 99.7.3 伊勢遺跡確認調査 報告費 II 2004.3	SB-1とSB-11の柱穴の切り合いを確認。 竪穴住居3棟・溝・柱穴多数。
57 次	阿村町字上番田 143-1	平成 11 年 5 月 10 日~ 平成 11 年 8 月 25 日迄	工場建設	2,000m² /3,288.99m²	乙貞 106 号 伊勢遺跡第 57 次 調査報告費 2001.3	弥生後期竪穴住居 1 棟。古墳時代前期竪穴住居 1 棟 溝 5 条・旧河道。
58 次	阿村町 155・158-1	平成 11 年 8 月 27 日~ 平成 11 年 9 月 14 日迄	確認調査	400m²	乙貞 106号	大型建物(SB-10)・竪穴住居の再調査。
59 次	阿村町 163	平成 11 年 9 月 16 日~ 平成 11 年 9 月 30 日迄	確認調査	200ml	伊勢遺跡確認調査 報告費 II 2004.3	海・竪穴住居 1 棟。
60 次	阿村町 155・158-1	平成 11 年 9 月 27 日~ 平成 11 年 12 月 14 日	確認調査	700m²	乙貞 107号 伊勢遺跡確認調査 報告費 II 2004.3	竪穴住居 1 1 棟・溝 3 条・土壙・柱穴。
61 X	阿村町 158-1	平成 12 年 1 月 4 日~ 平成 12 年 1 月 18 日迄	里道改良 工事	100ml	伊勢遺跡確認調査 報告費II 2004.3	竪穴住居3棟・溝・柱穴。
62 次	伊勢町 56	平成 12年2月1日~ 平成 12年3月21日迄	確認調査	400ml	乙貞 109 号 伊勢遺跡確認岡査報 告售 II 2005.3	竪穴住居 1 棟・焼土塊遺樽・旧河道。
63 次	伊勢町 62	平成 12 年 2 月 21 日 ~ 平成 12 年 3 月 21 日迄	確認調査	500m²	伊勢遺跡確認開査 報告費Ⅲ 2005.3	竪穴住居・柱穴・土壙。
64 次	伊勢町 56・59-1	平成 12 年 6 月 26 日~ 平成 12 年 7 月 6 日迄	確認調査	400ml	乙 貞 113 号 伊勢遺跡確認調査	旧河道・土壙。
65 次	伊勢町字南代 646·647	平成 12 年 8 月 22 日~ 平成 12 年 8 月 30 日迄	共同住宅	250m²	報告供 II 2004.3 守埋文平成 12 年 度年報	旧河道·提乱土壤。

調査次数	所在地	調査期間	調査原因	面積	参考文献	調査概要
66 次	阿村町 142-1	平成 12 年 9 月 11 日 ~ 平成 12 年 9 月 29 日迄	確認調査	400m²	乙貞 113 号 伊勢遺跡確認調査 報告費 II 2004.3	大溝1条・溝3条・土壙・柱穴。
67 次	伊勢町 171-1	平成 12年 10月 30日~ 平成 12年 12月 9日	確認調査	400m²	乙貞 114 号 伊勢遺跡確認岡査 報告費皿 2005.3	竪穴住居 1 棟・焼土塊再泅査。
68 次	伊勢町 284	平成 12 年 11 月 21 日 ~ 平成 12 年 12 月 4 日	確認調査	500m²	乙貞 114 号 伊勢遺跡確認開査 報告告Ⅱ 2004.3	旧河道・大溝。
69 次	伊勢町 75	平成 13 年 1 月 15 日~ 平成 13 年 1 月 31 日迄	確認調査	200ml	伊勢遺跡確認調査 報告費Ⅲ 2005.3	遺物包含層・溝。
70 次	伊勢町字南代 607	平成 13年2月2日~ 平成 13年2月15日迄	個人住宅	150㎡	守文報平成 13 年 度国 福助	旧河道。
71 次	伊勢町字森ケ下 426・427	平成 13 年 5 月 23 日~ 平成 13 年 7 月 19 日迄	宅地造成	500㎡ /2,701.95㎡	乙貞 117 号 現説資料 01.7.14	古墳時代前期~奈良の掘立柱建物7棟・溝。
72 次	伊勢町 259	平成 13 年 7 月 2 日 ~ 平成 13 年 7 月 6 日迄	共同住宅	250m²	伊勢遺跡確認調査 報告費Ⅲ 2005.3	旧河道・漭。
73 次	伊 勢町 613・ 614	平成 13 年 8 月 20 日~ 平成 13 年 8 月 29 日迄	共同住宅	250m²	伊勢遺跡確認調査 報告費回 2005.3	旧河道·柱穴。
74 次	阿村町 166-1・167	平成 13 年 9 月 5 日~ 平成 13 年 12 月 21 日迄	確認調査	800m²	乙貞 120 号 現説資料 01.12.17	大型竪穴住居 1 棟・棟持柱付大型建物 2 棟(SB-9・ 12)竪穴住居 2 棟、柱穴・土壙多数。
75.次	伊勢町字伊勢里 315-1·316-1	平成 14年 1 月 7 日~ 平成 14年 3 月 29 日迄	宅地造成	700nf /2,118 nf	乙貞 121 号 現説資料 02.3.30 伊 勢 遺 跡 75 次 調 査 報告費 2003.3	五角形住居を含む竪穴住居 17 棟・溝・柱穴。
76 次	伊勢町字南東浦 602-1	平成 14 年 2 月 7 日 ~ 平成 14 年 2 月 8 日迄	個人住宅	376㎡	伊勢遺跡確認調査 報告費Ⅲ 2005.3	J 国立柱建物・中世の柱穴。
77 X	伊勢町字南代 633	平成 14 年 6 月 18 日~ 平成 14 年 6 月 24 日迄	事務所建 築	723ml	伊勢遊跡確認調査報告費IV 2006.3	旧河道・溝・提乱
78 次	伊勢町南代 606	平成 14 年 7 月 9 日 ~ 平成 14 年 7 月 16 日	共同住宅	150㎡	乙貞 124 号 伊勢遺跡確認調査 報告費IV 2006.3	弥生後期の竪穴住居
79 次	阿村町 184・185	平成 14 年 7 月 29 日~ 平成 14 年 8 月 3 日迄	共同住宅	150/446m	乙貞124号 伊勢遺跡確認調査 報告費IV 2006.3	弥生後期の竪穴住居。
80次	阿村町字 168·170	平成 14 年 9 月 18 日~ 平成 14 年 10 月 31 日迄	確認調査	500m	乙貞 127号	弥生後期の竪穴住居・区画溝、柱穴等。
81 🛠	阿村町 166-1	平成 14 年 10 月 1 日~ 平成 15 年 3 月 15 日迄	確認調査	400㎡	乙貞 127 号	弥生後期の大型竪穴建物、独立椋持柱付建物。
82 X	伊勢町字大将軍 516-2	平成 14年 11月 11日~ 平成 14年 11月 14日迄	個人住宅	410m	伊勢遺跡確認調査 報告費IV 2006.3	弥生後期の竪穴住居、近世の溝・柱穴等。
83 次	伊勢町字森ヶ下	平成 14 年 11 月 18 日 ~ 平成 14 年 12 月 6 日迄	宅地造成	200/1,336ml	乙貞 126 号	古墳時代の溝、柱穴等。
84 次	伊勢町字井上 677	平成 15 年 2 月 12 日~ 平成 15 年 3 月 7 日迄	共同住宅	390㎡	乙貞 127 号 伊勢遺跡確認調査 報告費IV 2006.3	弥生後期の溝。
85 次	伊勢町字南代 648·649	平成 15 年 2 月 28 日	分譲住宅	885m²	伊勢遺跡確認調査 報告費IV 2006.3	投乱 。
86 次	伊勢町字南代 615-616	平成 15 年 3 月 12 日 ~ 平成 15 年 3 月 14 日迄	共同住宅	666m²	伊勢遺跡確認 調査報告費IV 2006.3	旧河道・潾・投乱。
87 次	伊勢町字南代 624・625	平成 15 年 3 月 18 日 ~ 平成 15 年 3 月 19 日迄	共同住宅	835m²	伊勢遺跡確認調査 報告費IV 2006.3	旧河道
88 X	伊勢町字南代 624・625	平成 15 年 8 月 4 日~ 平成 15 年 8 月 20 日迄	共同住宅	200/836.78m	乙貞 133 号	旧河道・澣。87 次胸査の再調査。
89 次	伊勢町字南代 642・643	平成 15 年 8 月 25 日~ 平成 15 年 8 月 29 日	分譲住宅	250/805m	乙貞 133 号	投乱坑が全体に広がる。
90次	伊勢町二町田 324·325	平成 15 年 9 月 26 日~ 平成 15 年 10 月 15 日	共同住宅	300/835.78ml	伊勢遺跡確認調査 報告書W 2006.3	中世の溝・柱穴
91 次	伊勢町宇南代 663-2	平成 15年11月23日~ 平成16年2月21日迄	個人住宅	90/231 m²	伊勢遺跡確認査報告告W 2006.3 乙貞 132・133号	旧河道・攪乱坑
92 次	伊努町字中東浦 62	平成 16 年 2 月 26 日~ 平成 16 年 3 月 1 日	確認調査	400m²	今回報告分	竪穴住居・柱穴・土壙・中世の掘立柱建物
93 次	伊勢町字伊勢里 320-3	平成 16 年 2 月 26 日~ 平成 16 年 3 月 1 日	個人住宅	101.27/465㎡	平成 15 年度文化 財報告費 2005.3	方形周溝墓と見られる澣。
94 次	伊勢町字南代 608	平成 16 年 5 月 26 日~ 平成 16 年 5 月 31 日迄	共同住宅	170/427.2m	今回報告分	投乱坑
95 次	伊勢町字森ヶ下 423	平成 16 年 8 月 20 日~ 平成 16 年 9 月 17 日	共同住宅	50/1,199.48m	乙貞 139 号	
96 次	阿村町字下大洲 168· 170	平成 16 年 9 月 27 日~ 平成 16 年 11 月 7 日	宅地造成	600 m²	今回報告分 乙貞 136 号	区画海・竪穴住居
97 次	伊勢町字伊勢里 567	平成 17年5月25日~ 平成 17年5月30日	個人住宅	200/461 m²	今回報告分	海・投乱
98 次	伊勢町字南代 608	平成 17 年 5 月 26 日~ 平成 17 年 5 月 30 日迄	分譲住宅	500/628.09m	今回報告分 乙貞 142 号	区画溝 竪穴住居
99 X	伊勢町字二町田 327-1	平成 17 年 12 月 19 日~ 平成 18 年 1 月 25 日	共同住宅	200/598ml	今回報告分 乙貞 144 号	五角形住居 掘立柱建物 井戸
100 次	伊勢町字二町田 327-1	平成 18年5月10日~ 平成 18年6月7日	共同住宅	200/598m	乙貞 147 号	五角形住居 掘立柱建物 井戸

第2章 伊勢遺跡の調査成果

第1節 第92次調査の成果

1、調査の経緯と経過

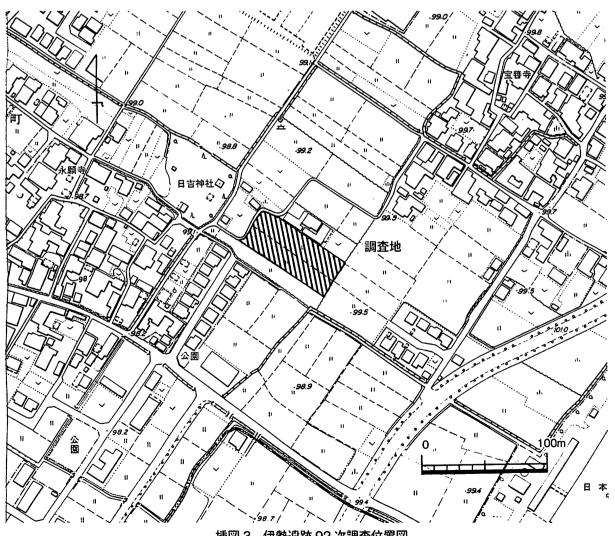
平成 13・14 年度に阿村町字下大洲で実施した 74、81 次確認調査によって、独立棟持柱付大型建物が 弧状に巡っていることが判明した。SB-8・9・12は棟持柱間の距離が18.4mと等間隔であり、S B-12の北西18mの地点でも大型建物の柱穴とみられる遺構が一部確認されている。弧状に配置され ているとすれば、74・81 次地点の北西側に新たに大型建物が発見される可能性がある。現地には民家 が存在することから、それに隣接する水田地について、土地所有者である古高町在住の新野輝子氏の承 諾を得て確認調査を実施した。現地調査は平成15年11月23日から平成16年2月21日の期間実施した。 平成16年2月21日には地元を対象に現地説明会を開催し、調査成果を見学して頂いた。

2、検出した遺構

現地調査はT-1とT-2に分け順次、平面検出を行った。T-1は大型建物の存在が予想される宅 地に近い地点を選定したもので、平均遺構検出面は98.6 mであった。

トレンチ1 (T-1)

SHー1 調査区東隅において一辺 6.8 mを測る隅丸方形の竪穴住居SH-1を検出した。一部掘削 調査を行った結果、床面までの残存壁高は 10 ~ 15cm で、かなり削平を受けていることがわかった。 幅 15cm を測る周壁溝が巡り、黒褐色粘質土の堆積がみられた。弥生時代後期の竪穴住居とみられる。 南北方向に伸びる落ち込みSX-1及び最下層のSD-1と竪穴住居の軸線が一致しており同時代の遺 構と考えられる。



挿図3 伊勢遺跡92次調査位置図

柱穴群 T-1 では多数の柱穴を検出しているが、古代末から中世と見られる柱穴と弥生後期から古墳時代前期の2つに分けることができる。古代末から中世の柱穴には灰黄色砂含土(10YR5/1)~黄灰茶色粘質土(10YR5/2)の砂を含む明るい埋土が堆積していた。弥生時代後期から古墳時代前期の柱穴には暗灰褐色粘質土(7.5YR3/1)から暗茶褐色粘質土(7.5YR2/1)の埋土の堆積が見られ、明確に異なっていた。T-2 で見られた古代末の建物跡がこの地点にも存在することが予想される。弥生~古墳時代前期と見られる柱穴は少なく、建物等を想定するには至らなかった。

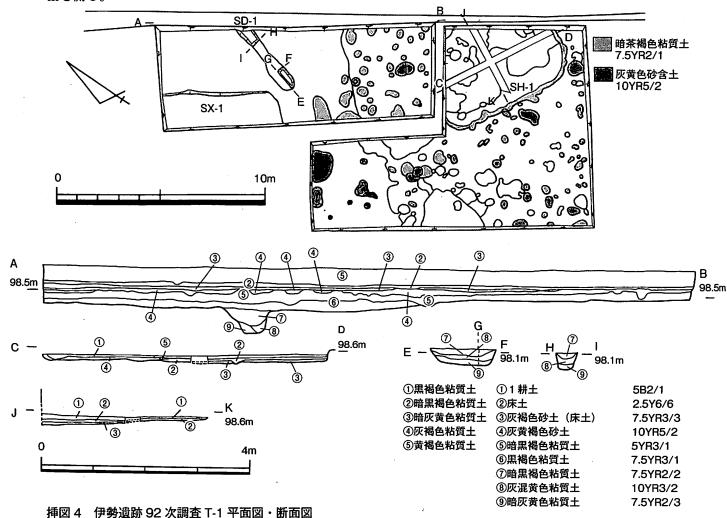
SX-1 SH-1 の西側では南北方向に伸びる落ち込みSX-1 を検出した。幅9 m以上で、一部掘削を行った結果、深さ90cm あることが判明した。落ち込みの最下層から溝SD-1 が検出された。溝は幅80cm、深さ45cm を測り、断面は深い逆台形を呈し、暗黒褐色粘質土の堆積が見られた。溝底からは受口状口縁甕 $3\cdot4$ が出土しており弥生時代後期の遺構であることが判明した。今回の調査地点から70 m北方で、平成12 年度に67 次調査を行っているが、ここで同様な落ち込みが検出されており、SX-1 は南北方向に遺跡内を区画する施設であった可能性がある。また、この落ち込みはT-1 より約10 m南側で途切れていることが分かっている。

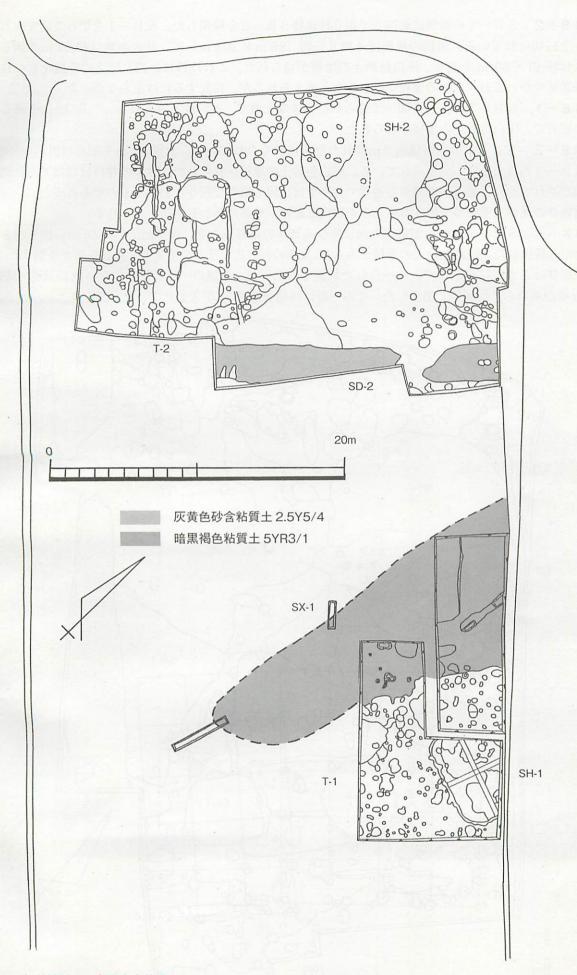
トレンチ2 (T-2)

T-1から北西10mの地点にトレンチ2を設定した。

SH-2 調査区北隅において楕円形の竪穴住居SH-2を検出した。長径8.8 m、短径8.2 mを測り、暗黒褐色粘質土(2.5YR3/1) の堆積がみられた。平面検出ながら高杯脚中部2が出土しており、弥生時代後期の竪穴住居とみられる。

SB-1 調査区南側で掘立柱建物SB-1の一部を検出した。西側に隣接するSB-2の柱穴列に切られており、それに先行する建物と考えられる。建物の東側はSD-2に切られることや井戸SE—1にも柱穴が切られていることから古墳時代以降では最も古い遺構の一つと見られる。建物は3間以上×5間(5.5 m以上×10.4 m)で、直径約 40cm の柱穴に灰黄色砂土の堆積がみられた。柱穴距離は約 21 mを測る。





挿図 5 伊勢遺跡 92 次調査全体図

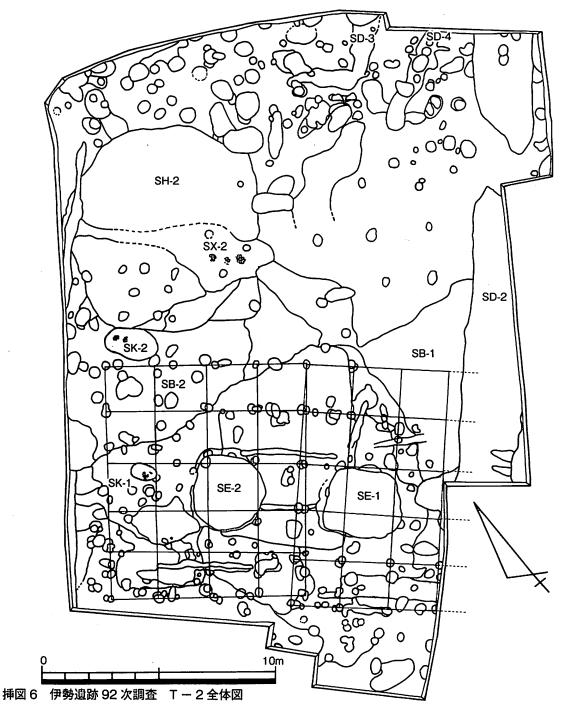
SB-2 SB-1の西側に隣接して掘立柱建物 SB-2を検出した。SB-1を切って建てられSE-2に切られている。建物の規模は 4間×5間($8.6 \text{ m} \times 10.2 \text{ m}$)で、柱穴距離は約 2.1 mを測る。柱穴は径 $40 \sim 50 \text{cm}$ を測り、灰白色砂土の堆積が見られた。これ以外に、同じ埋土の特徴をもつ柱穴が多数見つかっており、他の建物が存在したと考えられるが、復元するには至らなかった。

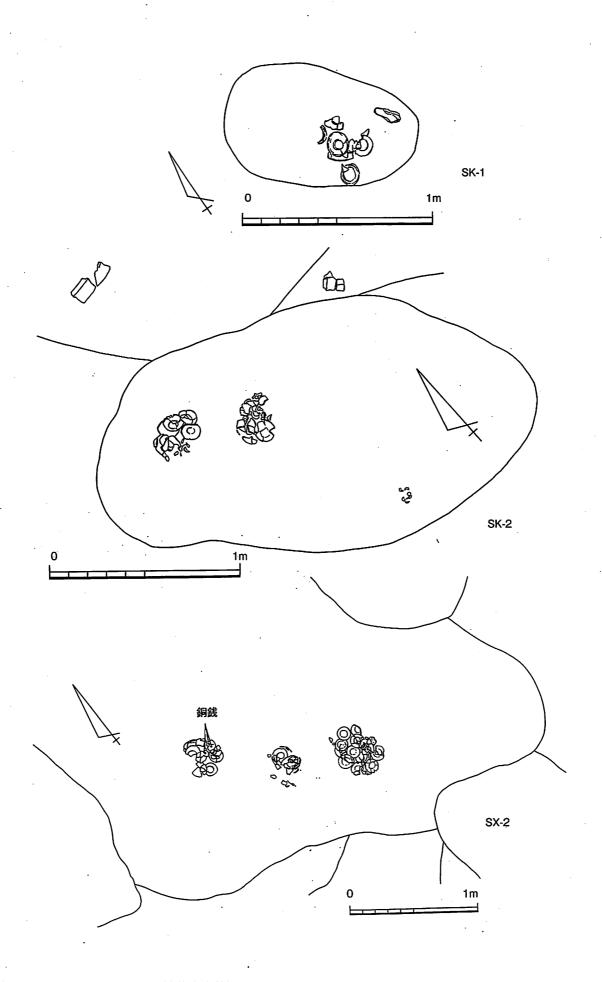
SE-1 SB-1の柱穴を切って造られた大きな土壙で、井戸跡とみられる。一辺 3.3 m を測る方形の掘方で、灰白色砂土の堆積がみられた。

SE-2 SE-1の北西側約3m離れた位置につくられている。直径3.2mを測る楕円形の堀方で、SB-2の柱穴を切って掘られている。灰白色砂土の堆積が見られた。2つの井戸はほぼ並んだ状態で検出されており、集落が継続する過程で井戸をほぼ同じ場所で掘りなおしたものであろうか。

建物群の北側で土師器を伴う落ち込みを検出したが、地鎮に係わる遺構とみられる。

SX-1 SH-2を切って東西方向に伸びる帯状の落ち込みを、幅70cmから2.5 m、長さ約8 mにわたり検出した。灰茶色砂土の堆積がみられ、東側の幅の広い部分の中央で土師器杯等が多数出土した。土器群は3カ所に分かれて、並べられた状態で出土した。西側の一群の杯の中から延喜通宝(907年)23枚が重ねられた状態で出土した。この一群には須恵器蓋23が含まれていた。壺の蓋とみられる。





挿図7 SK-1・2 SX-2 遺物出土状況

- SK-1 調査区西壁側で検出した。長径約1m、短径60cmを測る楕円形の落ち込みである。灰褐色 粘質土の堆積がみられた。平面検出の段階で複数の土師器杯が重ねて並べられた状態で出土した。
- SK-2 SB-2の北隅に隣接する位置で検出した。長径2.3 m、短径1.3 mを測り、灰茶色砂土の堆積が見られた。土壙北西側で土師器杯が2群に分かれていて、並べられた状態で出土した。杯群から約1 m離れて銅銭の破片が複数出土したが、風化が激しく種別は特定できなかった。これらの土壙は建物建築時の地鎮祭祀に係わる遺構とみられる。これらの出土遺物から平安時代後期(10世紀中葉~後葉)の屋敷地と推定される。
- **SD-2** 調査区南西壁に沿って大きな溝 SD-2を20mにわたって検出した。幅28mを測り、黄灰色砂の堆積が見られた。調査区東隅で一カ所途切れていて虎口状を呈するが、入り口部分とみられる。この溝の西側で井戸や掘立柱建物が検出されていること、SB-2の建物軸とSD-2が一致することからみて屋敷地の周りを巡る区画溝と考えられる。T-1でも同一方向の柱列が見られたことからSD-2の東側にも建物があったとみられ、集落内部を区画する溝であった可能性もある。

調査区北側でもやや大型の柱穴が検出されているが、建物を復元するには至らなかった。幅約 $1\,\mathrm{m}$ 程のL字型の溝SD- $3\,\mathrm{v}$ SD- $4\,\mathrm{c}$ は黒褐色粘質土の堆積がみられ、弥生時代後期の遺構と思われる。今回の調査地点は伊勢遺跡のなかでも高所にあり、削平をうけた竪穴住居の可能性もある。

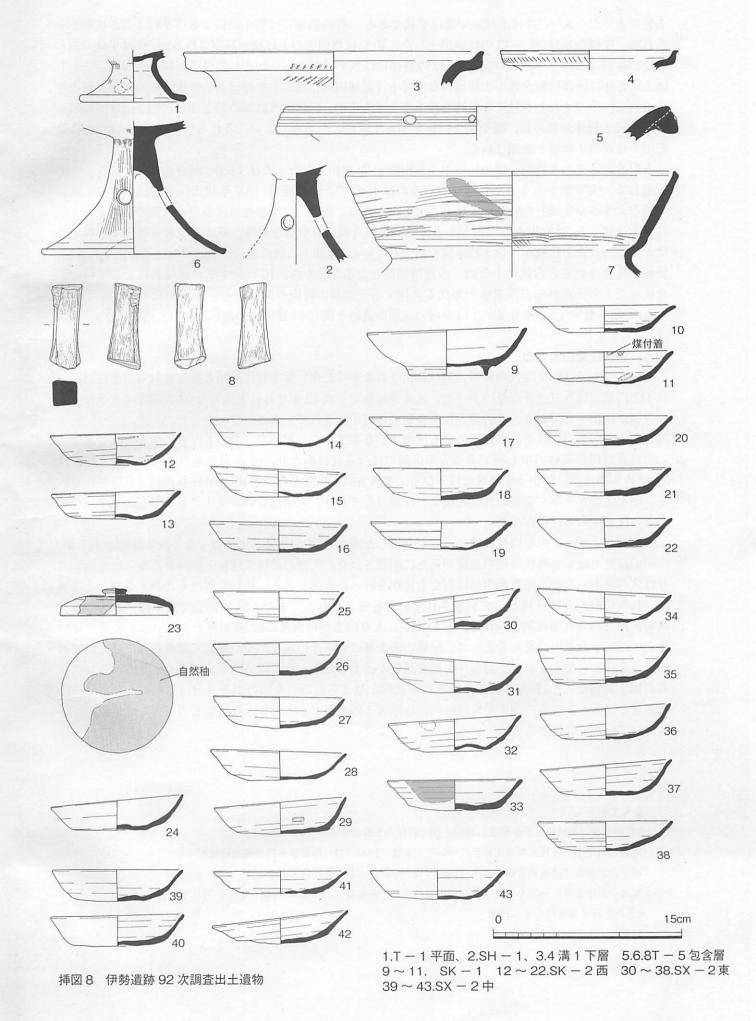
3、出土した遺物

今回の調査では平面調査ながら多数の遺物が出土した。以下、時期別に説明を加える。 弥生時代から古墳時代の遺物

1はT-1遺構検出時に竪穴住居SH-1の上層部で出土したものである。立ち上がりの低い脚部で、 裾部は短く屈曲し開脚する。体部との繋部に刷毛目がみられ、台付き甕の脚部と見られる。2はSH-1の埋土中より出土した高杯脚中部である。3方透かしを持ち、脚部外面に縦方向の細かい箆磨きが加 えられている。裾部は緩やかに開脚しており、後期中葉から後葉の遺物とみられる。SX-1内のSD - 1下層からは受口状口縁甕3・4が出土している。3は外反する第1口縁に短く上方に立ち上がる第 2口縁が付く。短い端面を形成し、外方へやや肥厚する。顎部に縦方向の列点文が付けられ、頸部付け 根にも列点文が観察される。4は外上方に短く立ち上がる第2口縁で、上端面を形成し外端部をややつ まみ出している。左上がりの列点文を口縁部外面に施す。これらの特徴から後期中葉から後葉の遺物と みられる。T-2では遺構面までに $5\sim10$ cm の遺物包含層が堆積していた。この包含層内から $5\cdot6\cdot$ 7・8の遺物が出土した。5は竪穴住居SH-2の上面で検出した。外上方へ大きく開く広口壺の口縁 部で、逆三角形状に垂下する口縁部が付く。外面は3条の擬凹線を施し、円形浮文を貼り付けている。 チョコレート色の胎土で、角閃石を含むことから生駒西麓産と推定され、搬入品とみられる。6もSH 2上面の包含層から出土したもので、高杯脚部である。円錐状に開脚するもので、脚端は丸く納める。 脚中部は中実で三方透かしがある。外面は箆磨きが加えられる。7は包含層内から出土した甕口縁部で、 短く屈曲した頸部から外上方に長く立ち上がる口縁に特徴がある。外面に横方向の荒い刷毛目が残る。 古墳時代前期の山陰系の甕とみられ、白濁した胎土からみて搬入品と思われる。8は長方形の小型の砥 石で、4面ともに弓なりに反っており激しく使用した痕跡がある。黄白色の目の細かい石材である。

古代の遺物

SK-1からは9~11の土師器杯が出土した。9は高台をもち、内外面ともに強い回転ナデが加えられる。10・11は平底無高台の杯で、器高 2.5cm、口径約 11cm を測る。口縁部は二段ナデを加え、11は端部に煤が付着している。SK-2からは 12~22の平底無高台の杯が出土している。器高 2.5~3 cm、径 10~11cm を測る。12~15 は底中央に指頭大の窪みがのこるが他は平底である。口縁部は二段ナデで仕上げられている。SX-2からは 23 から 43 の土器が出土した。出土状況から 3 群に分かれ、西側からは 23~29、東側は 30~38、中は 39~43 の土器がかたまって出土した。23 は壺の蓋と見られる須恵器で、口径 9.2cm、高さ 2 cm を測る。小さく平たいつまみが付き、口縁部は短く下方へ垂下する。内外面に自然釉がかかり、口縁端部に重ね焼きの痕跡が残る。24~29 は平底無高台の杯で、口縁部は 2 段ナデで仕上げられている。器高 2.5cm、口径 10~10.5cm でやや小型の杯群である。24 は指頭大の上げ底であるが他は平底である。東側の一群は 30~38 が出土しているが、すべて平底無高台



の杯であった。30~33 は上げ底で他は平底である。35 の底部には板小口によるヘラ起こしの痕跡がみられた。中群からは39~43 の杯が出土した。40 には指頭大の上げ底が観察されるが、他は平底であった。口縁部は二段ナデ仕上げで、42・43 の底部には板小口でのヘラ起こしの痕跡が観察された。これらの土師器杯は所謂回転台成形土師器のなかでも「低速回転台成形」と呼ばれる湖南地域の在地器種と考えられる。手づくねとも見える粗雑な仕上がりであるが、口縁部と底部の繋ぎ部分に幅3 mmほどの凹線が数条残る個体が見られ、緩やかな回転を加えて成形したとみてよい。これらの形式的特徴から10世紀中~後葉の土師器と推測される。

なおSX-2の西側の一群の杯の中から銅銭が22点出土した。直径1.9cm、厚さ約2mmを測る。風化が激しく、文字がかろうじて判別できるものは15枚で、延喜通寶(907年鋳造)と判読できる。他も銅銭も大きさや「延」の残存から延喜通宝とみられる。市内では延喜通寶は益須寺遺跡の地鎮祭祀とみられる遺構から32枚出土した例があるほか、栗東市岡遺跡や高野遺跡、草津市矢倉古墳群でも埋納遺構から延喜通寶が数枚から数十枚単位で出土している。皇朝十二銭の最後は958年の乾元大寶であるが、新銭が鋳造されると古銭は十分の一の貨幣価値となることから、10世紀中葉に流通銭貨としての役割を失ったと考えられる。同遺構の年代も共伴する土師器の特徴や銅銭から、10世紀代のなかで理解できる。土坑SK-1、2やSX-1は市内の益須寺遺跡と同じく、建築時の地鎮に係わる遺構とみられる。

4、調査成果のまとめ

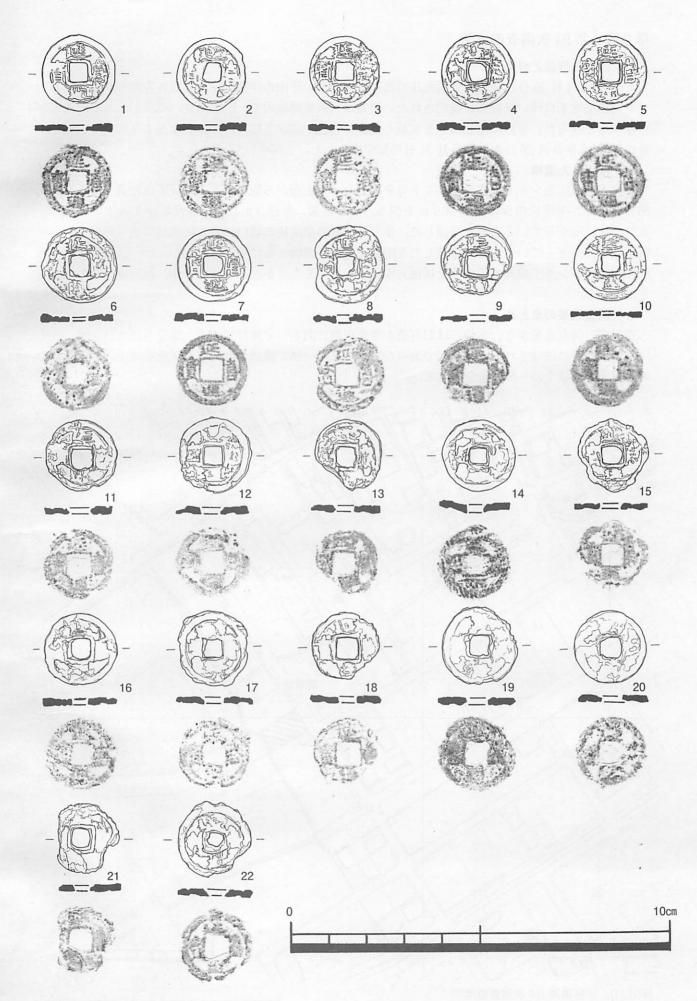
今回の調査では弥生時代の大型建物は検出されなかったが、弥生時代後期と推定される方形住居SH-1と円形住居SH-2が見つかった。東側隣接地で平成12年2月に実施した63次調査でも9棟の竪穴住居が検出されており、この地点にも多数の住居が営まれていることがわかった。

二つの住居の間には南北方向にのびる区画溝が存在することがわかった事も今回の調査成果である。この地点は伊勢遺跡の中心部である方形区画のほぼ真北にあたり、67 次調査地点から S B - 1 と S B - 10 の中間地点に向かって直線的に伸びる。東西方向の川跡から T 字状に 70 m程掘削され途切れている。出土土器からみて弥生時代後期後葉には埋没しており、大型建物群が集中する伊勢遺跡東半部の軸となる区画溝の可能性がある。

弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡が衰退した後、中世まで明確な遺構は少なくなる傾向があるが、今回の調査では平安時代後期の遺構が新たに確認された。大型の総柱式建物と井戸からなる屋敷地の周りに区画溝を巡らせ、屋敷地内には何度も地鎮を行った痕跡がある。建物も何度も建替えされたとみられ、長期にわたり居住地として利用されていたと考えられる。また、63次調査では2間×3間の総柱式の倉庫とみられる建物が検出されているが、入り口部から南東に約50m離れた地点にあたる。建物軸が一致しており同時期と考えられ、屋敷の南東部に倉庫等の施設がやや離れて配置されていたのであろう。土壙からまとまって土師器杯と延喜通寶が出土したが、建物建築時の地鎮祭祀と見られる。これらの出土遺物から10世紀中葉から後葉の年代観が与えられる。今回の調査地点は伊勢町の日吉神社に隣接する場所で、既往の調査でも遺跡内から墨書土器が出土しており、荘官などの有力な在地領主層が居住していた可能性もある。

参考文献

古代の土器『都城の土器集成 II』 1993・10 古代の土器研究会 代表 森郁夫 「近江地域出土の古代末期の土器群について」森隆 1988・11 中近世土器の基礎研究 IV 「回転台土師器の研究史素描」森隆 1994・12 中近世土器の基礎研究 X 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」小森敏寛、上村窓章 『研究紀要』 第3号 京都市埋蔵文化財研究所 1996



挿図 9 伊勢遺跡 92 次調査出土銅銭実測図

第2節 第94次調査の成果

1、調査の経緯と経過

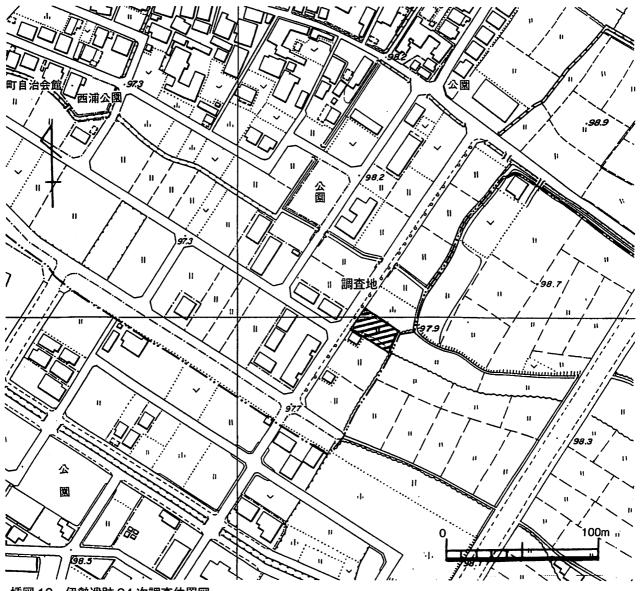
平成 16 年 4 月 26 日、栗東市野尻在住の高田實氏より、守山市伊勢町字南代 608 番地の水田地において共同住宅建築に伴い発掘届が提出された。現地は区画整理地内で、既往調査の成果からみて旧河道が存在するとみられ、事前に確認調査を実施し遺構の性格や広がりについて把握するよう努めた。現地調査は平成 16 年 5 月 26 日から同 5 月 31 日の期間実施した。

2、検出した遺構

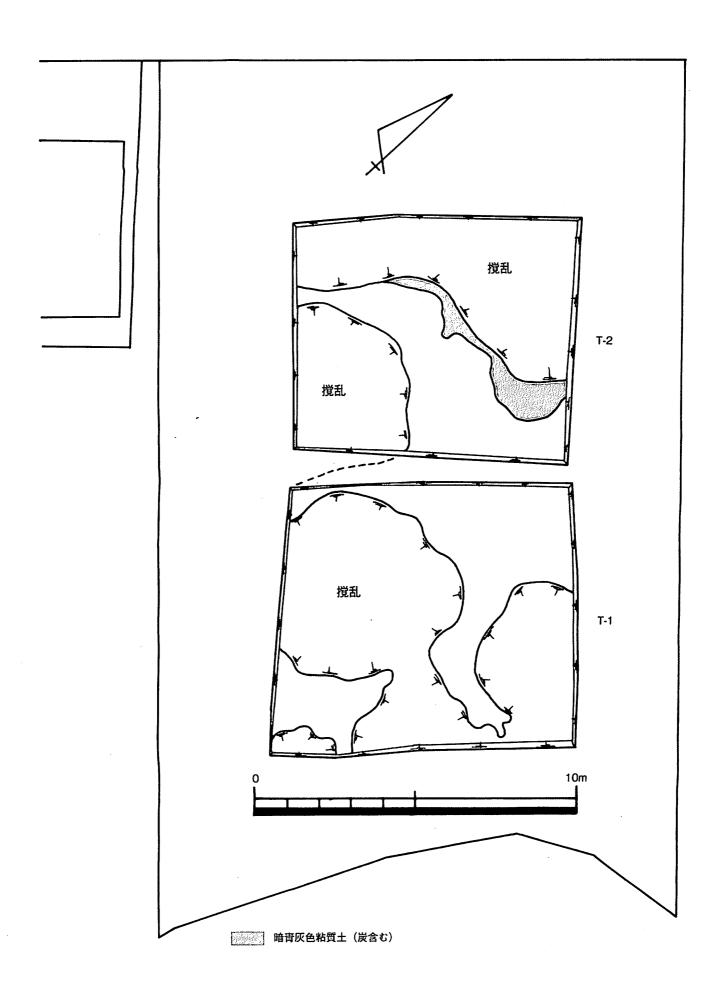
耕作土、黄灰色シルト、明黄色シルト等を除去し、地表面から約1m下の明青灰色粘質土上で遺構検出を行った。遺構検出面は標高95.9mを測る。その結果、直径5m以上の攪乱坑がT-1・T-2ともに全体に広がっていることを確認した。T-2北側の攪乱坑の肩口に暗青灰色粘質土(炭含む)の堆積が帯状に広がっていることを確認したが明確な遺構・遺物ともに検出されなかった。区画整理内では昭和初期にレンガ工場操業事の粘土採掘穴が広がっていることがわかっているが、攪乱坑はその採掘跡とみられる。

3、調査成果のまとめ

周辺部の調査成果から、本地点は旧河道が栗東市側に向かって伸びていると想定されていたが、攪乱 坑によって既に破壊されており不明であった。T-2の一部で検出された暗青灰色粘質土の堆積土はその旧河道の堆積土の一部と推定される。



挿図 10 伊勢遺跡 94 次調査位置図



挿図 11 伊勢遺跡 94 次調査全体図

第3節 第96次調査の成果

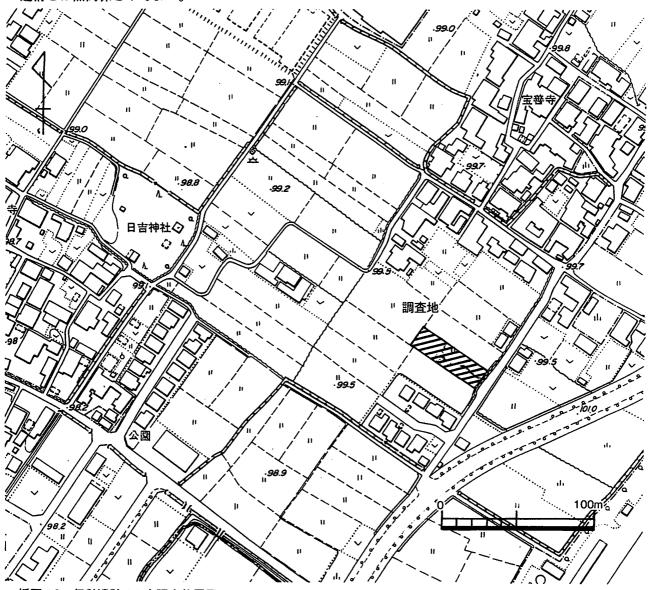
1、調査に至る経過

守山市阿村町字下大洲 168以番地の水田地において共同住宅建築に伴い設計業者から遺跡の有無について照会があった。この地域は伊勢遺跡の範囲内にあり、発掘調査が必要であること、事前に確認調査を実施し遺構の性格や広がりについて確認する必要があることを伝えた。これを受けて、平成 16 年8月2日付けで京都府福知山市の株式会社 丸商(代表取締役 福田秀雄)と土地所有者の竹中きよ氏から確認調査依頼及び発掘届が提出され、市教委では事前に確認調査を実施し、遺構の広がりを把握するよう努めた。現地調査は平成 16 年 9月 27 日から同 11 月 7 日の期間実施した。調査成果については平成 16 年 11 月 6 日に現地説明会を開催し、約 70 名の市民の方々に見学頂いた。宅地部分については建築基礎等が遺構面に及ばないよう協議を行った。

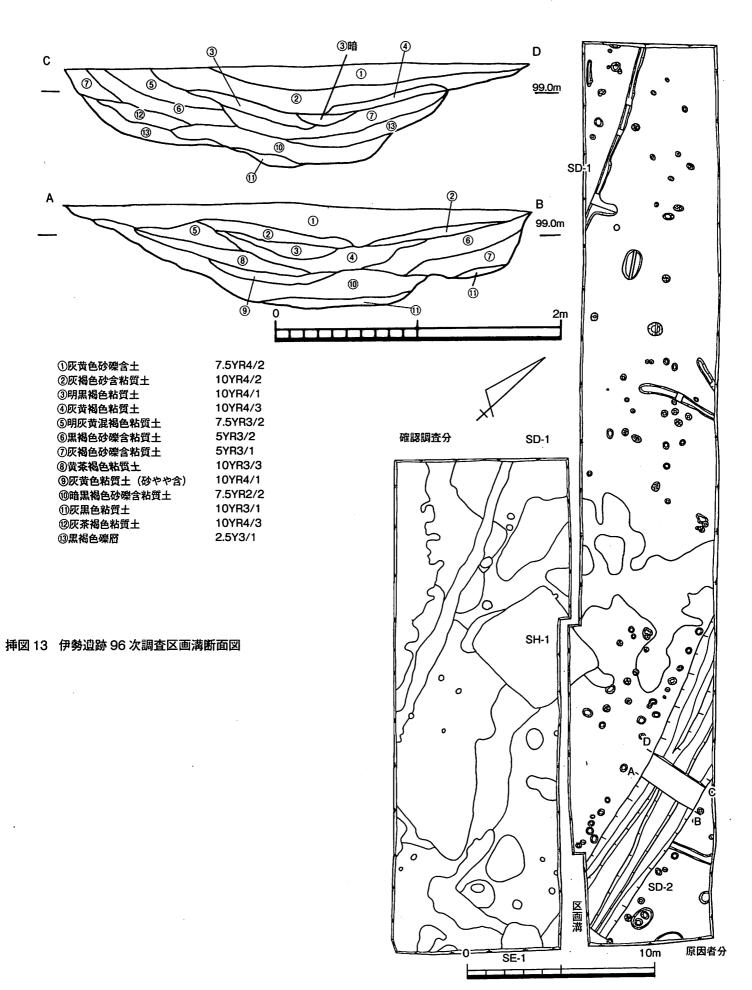
2、検出した遺構と出土遺物

今回の調査対象は宅地部分で、北西部分は平成14年度の80次調査で確認調査を実施しているため割愛した。北東側の道路予定地については原因者負担とし別途に発掘調査を実施した。

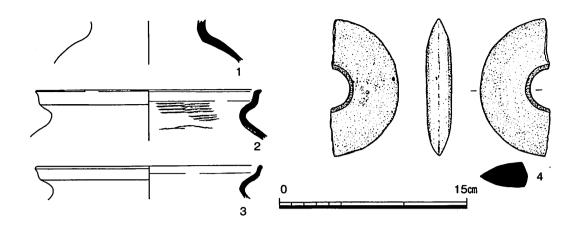
耕作土・床土、灰褐色粘質土を除去し、灰黄色シルト上面で遺構検出を行った。平均遺構検出面は99.2 mで、現地表面から約35cm下である。調査の結果、竪穴住居、溝、土壙等を検出した。調査区西壁側及び北隅、調査区中央部において砂混じりの灰褐色シルトの堆積が見られたが、地山の汚れであり遺構とは無関係とみてよい。



挿図 12 伊勢遺跡 96 次調査位置図



挿図 14 伊勢遺跡 96 次調査全体図



挿図 15 伊勢遺跡 96 次調査出土遺物

調査区中央ではSH-1を検出した。一辺約 4.5 mから 5.2 mを測る方形プランの竪穴住居である。 道路部分に一部かかっており、東隅を掘削調査したところ周壁溝が残存していた。残存高は約5cmで、 かなり削平されていることがわかる。床面には径60cmほどの範囲で焼土塊が残存していた。出土土器 片から弥生時代後期の住居と推定される。調査区北西部では南北方向に伸びる溝SD-1を検出した。 幅 50~ 110cmを測る溝で、道路部分で掘削調査を行ったところ深さ約 5 cmを測る浅い椀状の断面を呈 することがわかった。この溝の東側に伸びる区画溝SD-2に並行し、やや西側に弧状に伸びている。 調査区東隅で区画溝SD-2の一部を検出した。中・近世の井戸と見られる土坑SE-1に切られてい る。道路部分の調査で幅4m、深さ90cmを測る溝であることが分かっている。断面形は浅い逆台形を 呈し、中央部は幅 50cm~ 110cm、深さ 10~ 20cmの規模で掘削されており、 2 段に掘られていることが わかった。道路部分の調査では溝底から1~3の弥生土器が出土しており、弥生後期の遺構と考えられ る。1は壺肩部で、長頸壺と推測される。2・3は受口状口縁甕の口縁部で、2は直立する第2口縁の 端部を外方へややつまみだしている。頸部内面には横方向の刷毛調整が見られる。3は顎部の屈曲が甘 く、第2口縁も外上方へ伸び小さな端面を形成する。これらの遺物の特徴から後期末に埋没したと推定 され、伊勢遺跡の衰退期と一致する。SD-2を切ってSE―1がつくられているが、一辺 21 mを測 る隅丸方形のプランを呈する。明灰色砂土の堆積がみられ中・近世の井戸と推測される。区画溝SD – 2の西側で柱穴を複数検出しているが、暗茶褐色粘質土の堆積がみられ柵跡の可能性がある。

平面検出時に灰褐色粘質土(遺物包含層)から環状石斧4が出土した。半分に折れているが、直径11cm、厚さ1.9cmを測る。中央孔の直径は約3cmを測る。石材は砂岩で丁寧に研磨されている。弥生中期の遺構が近隣にあったと考えられる。

3、調査成果のまとめ

今回の調査では溝SD-1と区画溝SD-2が約12mの距離を保ち並行し伸びることが判明した。この地点は伊勢遺跡の東端と推定されるが、その境界として区画溝SD-2が掘削されたと考えられる。SD-1や区画溝SD-2は北西方向に向かって弧状に伸びる特徴があり、81次調査等で確認されている円周上に並ぶ独立棟持柱付き建物群とともに同心円状に配置されている可能性がある。いづれにしても、2つの溝の間に竪穴住居SH-1が営まれていること、区画溝の東側では弥生時代の遺構が極端に少なくなることを考えると、伊勢遺跡の南東部を区切る施設であったと考えられる。

環状石斧は伊勢遺跡では初めて出土したもので、弥生時代後期以前に集落が存在したことが想定された。既往調査でも67次調査では弥生時代中期の竪穴住居が検出されているほか、磨製石斧が採集されていることなどから、先行する小集落があったとみてよい。

第4節 第97次調査の成果

1、調査の経緯と経過

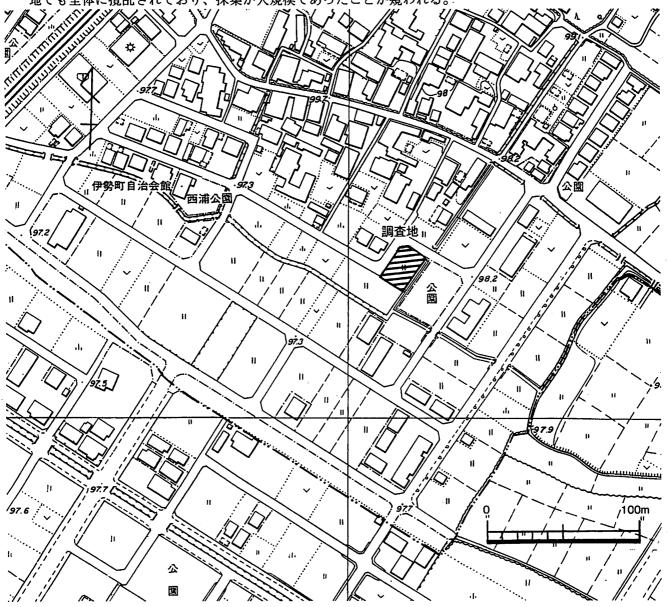
守山市伊勢町字伊勢里 567 番地において、伊勢町在住の山川秀明氏より個人専用住宅建築に伴う発掘届が平成 17 年 3 月 7 日に提出された。建設予定地は南代区画整理地内で、既往調査成果からみて弥生時代から室町時代にかけての遺構密度が高いと予想されたため、事前に確認調査を行った。土置き場を確保する必要があるため、T-1·T-2の2つに分け平成 17 年 5 月 25 日から同 5 月 30 日までの期間、現地調査を実施した。

2、検出した遺構と出土遺物

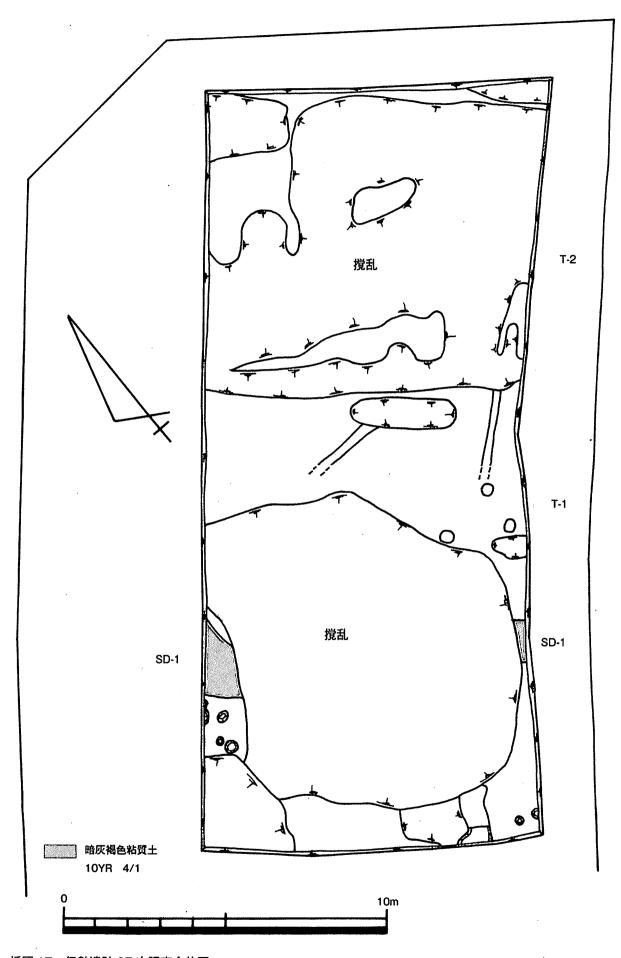
耕作土・床土を除去し、地表下約 30 cm の黄色シルト上面で遺構検出を行った。遺構検出面は平均で 96.5 m を測る。その結果、全体に攪乱坑が広がっていることを確認した。攪乱坑はT-1、T-2の全体におよぶもので、それ以前の遺構はほとんど消失したものとみられる。T-1 中央部の攪乱坑の周辺に中世の柱穴が若干みられたことから、中世の屋敷地がこの地点にもひろがっていたことが想定された。 さらに、導水施設の取水源とみられる SD-1 (伊勢遺跡確認調査報告書 \mathbb{N} 所収) の一部も検出され、想定どおり東西方向に直線的にのびていることが確認された。

3、調査成果のまとめ

南代の区画整理地内ではレンガ工場操業時の粘土採掘跡が幾つも確認されているが、今回の調査対象 地でも全体に攪乱されており、採集が大規模であったことが窺われる。



挿図 16 伊勢遺跡 97 次調査位置図

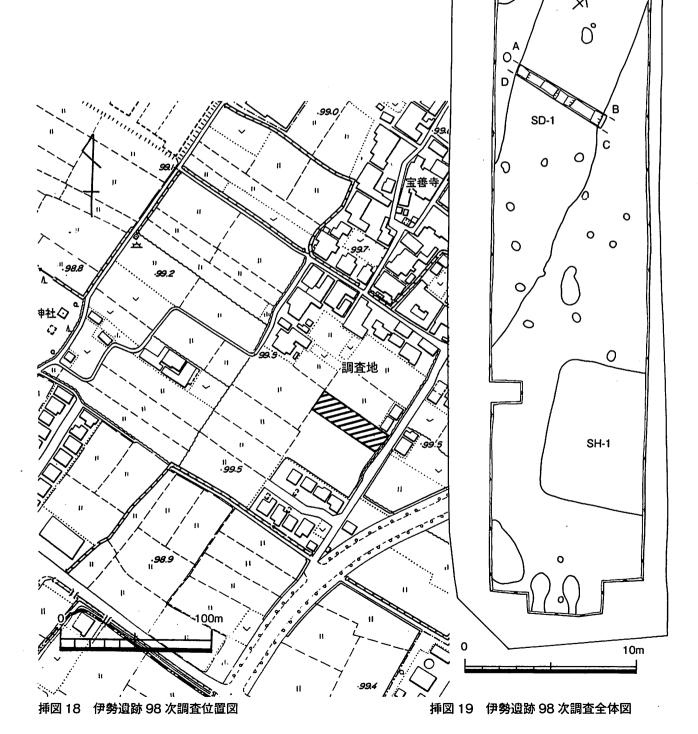


挿図 17 伊勢遺跡 97 次調査全体図

第5節 第98次調査の成果

1、調査に至る経緯及び経過

96 次調査地点の北東側の水田地において、宅地造成に伴う 発掘届が株式会社 丸商(代表取締役 福田秀雄)から平成 17年6月14日付けで提出された。これを受けて、遺構の広が りを把握するために確認調査を実施した。現地調査は平成17 年8月18日から同9月12日までの期間実施した。現地調査 終了後、宅地造成及び、分譲住宅建築に伴い地下遺構を痛め ないように設計協議を行い、保存を依頼した。96 次地点と同 様に地耐力が高く、造成土内に基礎底が止まることを確認し た。



0

2、検出した遺構及び出土遺物

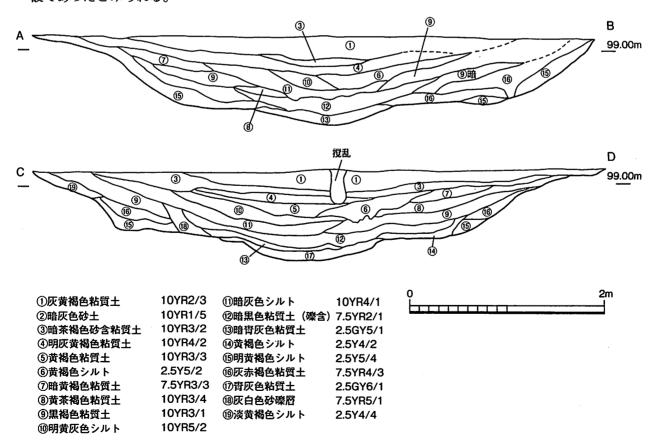
平成 16 年度に実施した 96 次調査の北東側隣接地の調査で、耕作土・床土、灰褐色粘質土を除去し、黄色シルト上面で遺構検出を行った。平均遺構検出面は 99.3 mである。その結果、弥生時代後期とみられる竪穴住居、区画溝、中世の掘立柱建物等を検出した。竪穴住居 S H - 1 は調査区南東隅で検出した。一辺 8 mを測る大型の竪穴住居で、灰茶褐色粘質土の堆積がみられた。埋土や出土土器片から弥生後期と推定される。ただ、区画溝と軸を異にすることから時間差があるとみられる。区画溝 S D - 1 は 96 次調査の延長上にあたる遺構である。幅 6 m、深さ 90cm を測り、北西に行くに従って溝幅が拡大している。断面観察を行った結果、中・上層には礫を含む茶褐色粘質土、下層には黒褐色粘質土、最下層には暗青灰色粘質土の堆積がみられた。96 次地点と同様に浅い逆台形の断面形状を呈し、溝底中央は更に掘削され 2 段掘りになっていた。この区画溝からは遺物がほとんど出土しないことから、時期決定が難しいものの 96 次調査成果からみて後期末に廃絶したと推定される。これは、区画溝が埋まらないように管理されていた可能性があること、伊勢遺跡内部の遺構の密集度からみて土器等を廃棄しないよう意識されていた溝であったと考えられる。

区画溝を切って中世とみられる掘立柱建物 SB-1 が営まれている。 $2 \times 4 \times 4 \times 4 \times 6$ が 物で、柱穴距離は約 $2.3 \times 6 \times 6$ かを測る。 束柱はなく、平地式の建物と推定される。

この他、調査区南東隅では風倒木痕、北西隅では近世の耕作痕などが検出されたが全体に遺構密度は希薄であった。

3、調査成果のまとめ

今回の調査では弧を描きながら北西へ伸びる区画溝SD-1、さらにその東側に竪穴住居SH-1が存在することが確認された。区画溝の外側にも住居跡があり、区画溝が居住空間を画する施設ではなく、むしろ大型建物群を外界と区画する施設と考えるほうが妥当であると思われる。さらにその外側には幅7m、深さ2mを測る大溝が南北方向に配置されることから、これが遺跡の内と外を区画する本来の施設であったとみられる。



挿図 20 伊勢遺跡 98 次調査 SD - 1 断面図

第6節 第99次調査の成果

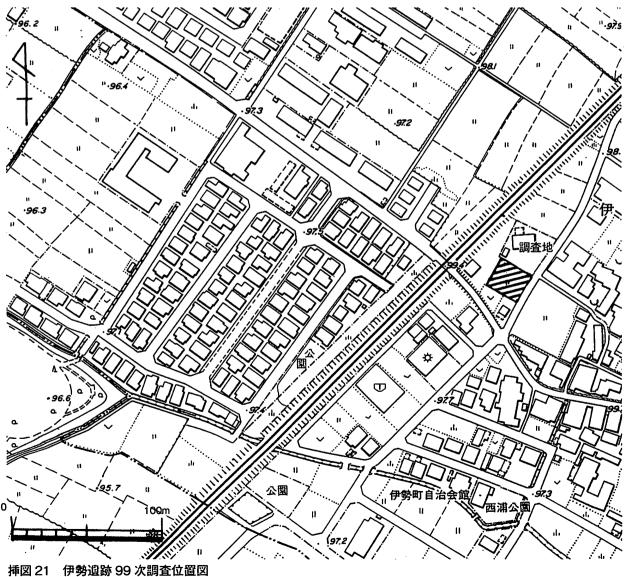
1、調査に至る経過

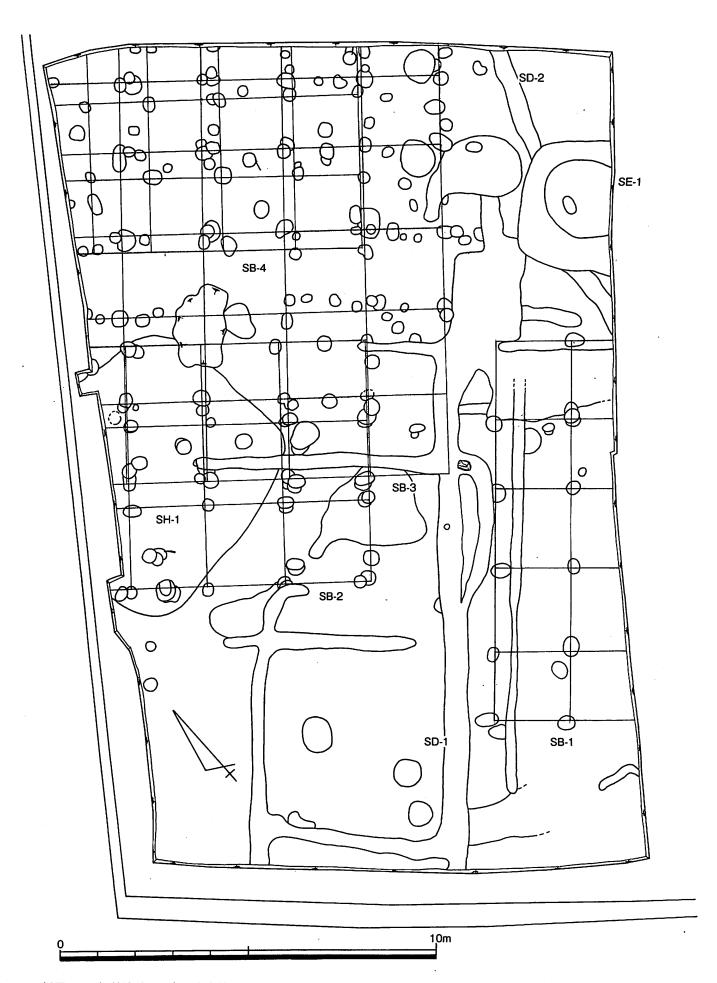
平成 17年11月29日、伊勢町在住の山外勝氏より伊勢町字二町田327-1番地他の水田地における共 同住宅建築に伴う発掘届が提出された。開発予定地は五角形住居が見つかった4次調査地点に隣接する 場所で、中世の遺構も広がっていると予想されることから、確認調査を実施することを伝えた。現地調 査は平成17年12月19日から平成18年1月25日の期間実施した。調査によって、新たに五角形住居 が 1 棟検出されたことから、平成 18 年 1 月 21 日に現地説明会を実施し、約 60 名の市民の方々に見学 頂いた。調査終了後、建築によって遺構が傷まないよう工法を検討するよう依頼した。どうしても工法 変更できない場合は本調査が必要であることを伝えた。

2、検出された遺構

耕作土、床土を除去し、現地表下 30cmの黄色シルト上面で遺構検出を行った。平均遺構検出面は標 高 97.5 mであった。調査の結果、鎌倉時代の掘立柱建物 4 棟以上・井戸・溝、弥生時代後期の竪穴住 居1棟を検出した。

中世の柱穴は多数検出されており、何度も建替えられていたことが想定されるが、そのうち4棟を復 元することができた。SB-1は2間以上×5間 (3.5 m以上×10 m) の総柱式の大規模な建物である。 柱穴は径約 40cmで、柱穴距離は約2mを測る。SB-2は3間×3間以上(6.3 m×6.3 m以上)の総 柱式建物である。柱穴径は30~40cmで、柱間距離は2.1 mを測る。複数の地点で柱穴の切合いがみられ、 同一地点で建替えあるいは修復が行われた可能性がある。SB-3は4間以上×5間以上(8.5 m以上

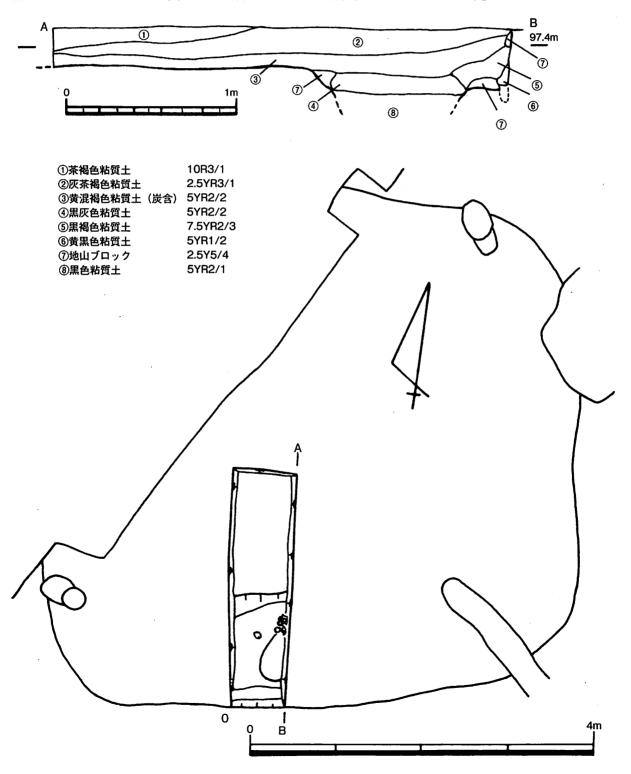




挿図 22 伊勢遺跡 99 次調査全体図

× 10.5 m以上)の総柱式の大規模な建物である。柱穴径は 40 ~ 50cmで、柱間距離は 2.1 mを測る。同建物も複数の地点で柱穴が 2 ~ 3 回切合っており、建替えないし修復がおこなわれたと推定される。 S B - 4 は 2 間以上 × 4 間以上(4 m以上 × 7 m以上)の総柱式の建物である。柱穴径は約 30cmで、柱間距離は 1.8 mを測る。調査区北東隅において一辺 3.4 mを測る方形プランの井戸 S E — 1 を検出した。灰白色砂土の堆積がみられ、大規模な井戸と推測された。建物の柱穴や井戸の埋土内には黒色土器椀の細片が含まれており、鎌倉時代の遺構と推定された。

このほか、SB-1・3の柱穴を切って建物に平行して伸びるSD-1を検出している。幅 $30\sim60$ cmで、田の字状に掘削されており、耕作痕と思われる。砂を含む灰白色粘質土の堆積が認められ、内部 には多量の焼土が含まれていた。中世の屋敷が最終的に焼失し廃棄されたのではないかと推測される。 焼土は 5cm程の塊で、植物質のスサを含んでおり壁や屋根裏に用いられたと推定される。



挿図 23 伊勢遺跡 99 次調査 SH - 1 平面図

調査区東隅において南北方向に伸びる溝を約8mにわたり検出した。幅約50cmで、灰黄色砂土の堆積が見られた。井戸SE-1に切られており、埋土の特徴からみて中世以前の溝と考えられる。

調査区西壁中央において竪穴住居SH-1を検出した。竪穴住居には黒褐色粘質土の堆積がみられ、弥生土器片が含まれていた。竪穴住居の東辺幅は 4.8 m、南辺幅は約 6 mを測る。検出した 3 つの辺ともに直角とならず、広角に開いていることから五角形住居の可能性が高い。一部掘削調査を行ったところ、残存壁高は約 20cmあることが判明した。南辺にむかって幅 1.2 m、深さ 10cm程落ち込み、壁際には幅 10cm程の溝が巡っていることがわかった。周壁溝とみられる。さらに南辺壁中央において貯蔵穴とみられる径 80cm程の土坑が検出された。貯蔵穴の上面からは弥生土器 1 ~ 3 が出土した。 1 は長頸壺で、球形の体部から上方にやや開きながら伸びる口頸部が付く。端部は横ナデによって尖頭状に収められる。外面は縦方向の荒い刷毛が施され、内面に指頭痕、繋ぎ痕が観察される。口頸部付け根に直線文、肩部に列点文、直線文が施され、在地の受口状口縁壺や甕と同じ施文や荒い刷毛調整を行う特徴がある。 2 は 1 と同一個体の可能性が高い壺底部である。ドーナツ状の上げ底で、外面に荒い刷毛調整が施される。 3 は高杯脚中部で、内面にしぼり痕が見られる。これらの土器の特徴からみて、弥生時代後期中葉の年代観を与えることができる。第 4 次調査で検出された五角形住居とほぼ同時代の住居と考えられる。

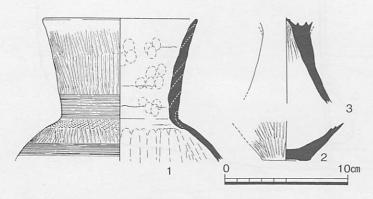
3、調査成果のまとめ

今回の調査では鎌倉時代の大型の井戸や掘立柱建物が検出され、大きな屋敷地があったことが想定された。建物は何度も建て替えられており、長期間にわたり存続していたことがわかる。また、大型の井戸跡には建物が重複していないことや、井戸の周辺及び東側に柱穴が見られないことから、中庭の西隅に井戸が設けられ、その南側と西側に建物が配置されていたことが想定される。建物を切る SD-1 には土壁材とみられる焼土塊が堆積していたことから、最終的に火災を受けて屋敷地が廃棄されたとみられる。第4次調査では中世の遺構は少なく、北側隣接地の 10 次調査では建物跡が検出されていることから見て、北東側に屋敷地が広がっているものと考えられる。

竪穴住居SH-1はその平面形状や南辺中央の土坑の存在から五角形住居と見られる。床面から出土した土器から第4次調査の五角形住居とほぼ同時代と推定された。伊勢遺跡西側では弥生時代後期の竪穴住居が多数検出されているが、五角形住居は本例で8例目である。滋賀県内の検出例をみても伊勢遺跡内の五角形住居の検出数は傑出しており、同遺跡の特徴と考えられる。弥生時代後期の五角形住居は、山陰から北陸にかけての日本海沿岸地域に多く分布しており、近江及び伊勢遺跡がそれらの地域と密接な交流があったと推測される。弥生後期中葉から後葉にかけて瀬戸内ルートの停滞、日本海ルートの活性化が指摘されているが、伊勢遺跡の盛行期はこの時期に重複しており、地域間交流の結節点として重要な役割を担っていたと見られる。

参考文献

「伊勢遺跡の構成と五角形住居」『伊勢遺跡 75 次発掘調査報告書』 『守山市文化財報告書』 2003・3



挿図 24 伊勢遺跡 99 次調査出土遺物

第3章 伊勢遺跡北東部の区画施設について

今回の調査では、伊勢遺跡の南東部から北東部の区画施設を考える上で重要な成果があった。特に 96・98 次調査で検出された 2条の並行する区画溝は弧状にめぐるもので、独立棟持柱建物群の位置関係と深く係わっている可能性が高い。さらに、92 次調査で検出された南北方向の区画溝も遺跡内部を 区切る役割があったとみられる。遺跡内部の大型建物の位置関係と区画施設の係わりについて、若干の 考察を加え結びとしたい。

1 伊勢遺跡東側の大溝

伊勢遺跡は東西方向に舌状に伸びる扇状地上の微高地に広がる遺跡である。その東側は南北方向に直線的に掘削された大溝で切断し、後背地から遮断している。大溝は幅7m、深さ2mと大規模なもので、逆台形の断面形状を呈する。最下層は2段掘りになっていて弥生後期末の土器が廃棄されていた(伊勢遺跡確認調査報告書 II 2004·3)。この大溝の東側にも弧状に伸びる幅約3m、深さ1mのV字溝が伸びており別の区画が存在するものと想定された。この区画内からは1間×3間の掘立柱建物が見つかっており、一般的な居住空間とは異なった空間があったとみられる。ただ、大溝より東側は遺構密度が明らかに希薄であり、遺跡の東限を区切る環濠状の機能をもっていたと考えてよい。

2 新たに検出した区画溝

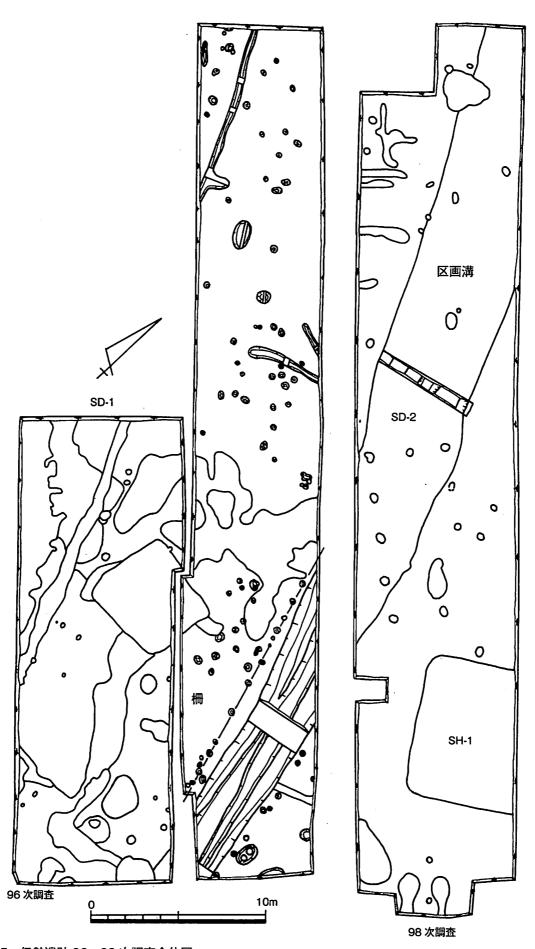
大溝の西側で行った96・98 次調査では新たに北西方向に弧状に伸びる溝2条を検出した。区画溝は幅32 m、深さ90 c mを測る逆台形の断面形を呈する溝で、北へ向かうに従って溝幅を広げていく。98 次地点では幅6 m、深さ90cmを測り伊勢遺跡東限の大溝に次ぐ規模となっている。断面形も似ており、同一の溝とも思われるが、96 次地点の溝幅、深度が極端に異なることから、現時点では大溝からY字状に分岐する別の溝と考えられる。

今回の調査で、この区画溝を約50 mにわたり北西に向かって弧状に伸びることを確認した。96 次地点では溝の西側で約1 m間隔の柱列を検出しているが、98 次地点では見られなかった。96 次地点では溝幅が3.2 mと狭く、かなり削平されていると見られる。これに対して98 次地点では溝幅が約6 mもあり、溝の西肩部が緩やかに一段落ち込むことから、この部分に柱列があるとすれば掘削する以外には検出できないとも言える。この区画溝の西側約30 mの地点では、大型竪穴建物や独立棟持柱式建物などが検出されている。このような特殊な建物群を外部から視覚的に遮断する柵などの施設があった可能性もある。

この区画溝に並行して幅 1 m 前後の浅い溝 SD-1 が検出された。区画溝から西へ 12.7 m 離れた位置にあり、ほぼ並行し北西方向に弧状に伸びている。柵等の施設は伴わないが、東側へ枝溝が伸びる地点もあることから、排水等の機能をもつと推定される。位置関係からみて区画溝を意識して SD-1 は掘削されたと考えられ、大型建物群との位置関係が注目される。 2 条の溝に近接して 2 棟の竪穴住居が検出されたが、これらの住居の建物軸とは相関性が見られず、時期的に並行するものではないと見られる。この区画溝はどのように伸びているのであろうか。

67 次調査では阿村町から伊勢町日吉神社に向かって流れる東西方向の旧河道を検出した(伊勢遺跡 確認調査報告書 II 2004・3)。平成 11 年度に実施した 64 次調査でもその西側延長部を確認している。この旧河道は弥生・古墳時代の遺構を切り、砂礫が厚く堆積するもので中・近世の陶器片が含まれていた。近世に埋没したとみられ、地籍図に若干、川の痕跡が残る。67 次地点では砂礫の堆積する旧河道に切られた黒褐色粘質土の堆積する遺構を 47 mにわたり確認した。位置関係や土質からみて区画溝の延長部分とみられる。旧河道に沿って西側に向かって湾曲しており、64 次地点では旧河道と重なっているものと見られる。

以上の事実関係からみて 96・98 次調査で検出した区画溝は西方に行くにしたがって弧状に伸び、64 次地点、67 次地点を通過するものと推定される。方形区画内を中心に半径 190 m前後の円弧に沿うように区画溝が掘削されていると考えられる。円弧の中心をあえて求めるとすれば、SB-1の南側 40 m前後の地点と推定されるが、この地点は古墳時代及び中世の旧河道が交差する場所で、弥生時代の遺



挿図 25 伊勢遺跡 96・98 次調査全体図

3 落込みSX-1

本報告分の92次調査では、南北方向の落込みSX-1を24 mにわたり検出した。幅約6~9 m、深さ80cmを測る溝状の落込みで、溝底は幅80cm、深さ30cmを測る2段掘りとなっていた。断面形状は伊勢遺跡東限の大溝や円弧状の区画溝に似ている。試掘トレンチを入れた結果、92次調査T-1の南側約10 mの地点で途切れていることがわかった。同様な落込みは64次地点でも検出されており、南方へ伸びていることが分かっていて、92次調査地点の落ち込みSX-1に接続するものとみられる。この溝を復元すると東西方向の区画溝から分岐して、南側へ約70 m T 字状に伸びていると推測される。

4 区画溝と大型建物との位置関係

1 区画溝と独立棟持柱建物群

96・98 次調査では区画溝 S D -2 と小溝 S D -1 は、北西方向に円弧を描きながら伸びることがわかった。二つの溝の距離は $12 \sim 13$ m離れている。既往の確認調査によって伊勢遺跡大洲地区では、独立棟持柱大型建物が円弧を描くように配置されていることがわかっている。大型建物 S B -8 、S B -9 、S B -12 は建物形式や規格に共通点があるほか、独立棟持柱間の距離が 18.4 mと等間隔に配置されており、計画性の高い建物群である。

これらの建物群の配置と今回検出された区画溝は無関係ではないと思われ、その位置関係について検討する。

SB-8は1間×5間($4.5 \text{ m} \times 9 \text{ m}$)の独立棟持柱建物で心柱をもつもので、伊勢遺跡内では規格的な大型建物である。この建物の東側で大溝と区画溝が分岐すると考えられる。建物と溝の分岐点までの距離は約40 mと推測される。SB-8の南側約43 mではSB-7が検出されている。距離がやや離れており等間隔に並ぶものではないが $1 \text{ ll} \times 5 \text{ ll}$ と推定され、やはり心柱を持っている。SB-7とSB-8の間は市道があり、大型建物の有無は不明である。この伊勢遺跡東限の大溝とSB-8の距離は38 mを測る。

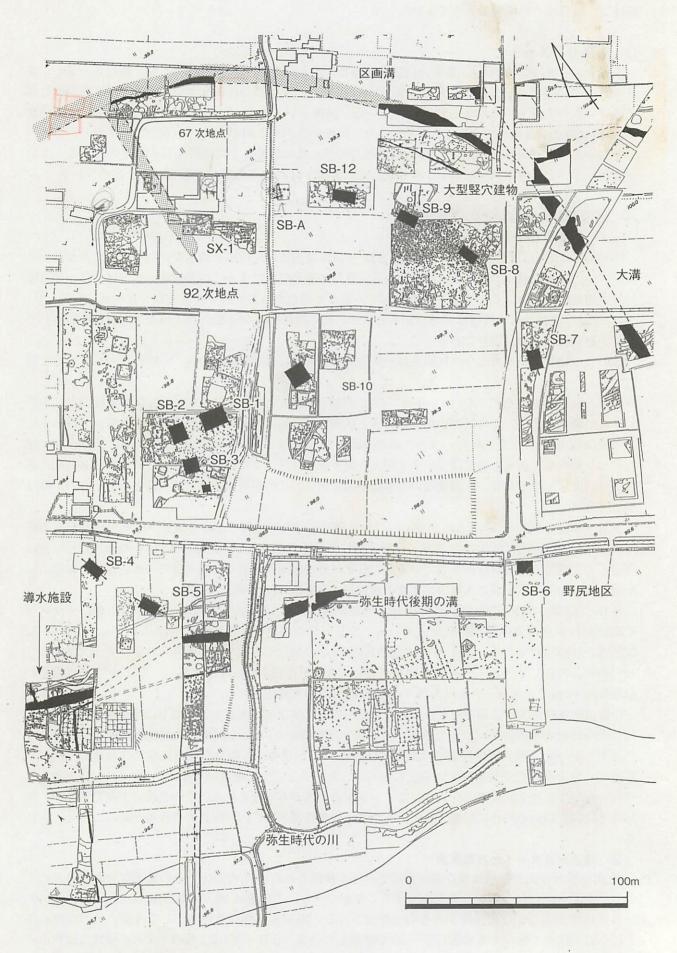
SB-9は1間×5間(4.5 m×9 m)の独立棟持柱付大型建物である。SB-7との棟持柱間の距離は18.4 mで規格性の高いものである。北東側に位置する区画溝との距離は40 mを測る。SB-9に隣接して大型竪穴建物が検出されているが、SB-9の南側の妻通りと竪穴建物の南辺が同じ軸線上に配置されている。区画溝と大型竪穴建物の北東辺の距離は25 mを測る。

SB-12は1間×5間($4.5 \text{ m} \times 10 \text{ m}$)の独立棟持柱付大型建物である。南東辺の妻側にテラス状の露台が付く点で他の建物と異なっている。SB-9の棟持柱との距離はやはり 18.4 mと等間隔で、規格性が高い建物である。SB-12の北西側約 18 mの地点でも大型建物とみられる柱穴が7個検出されており、SB-7・8・12 に続く建物(SB-A)が存在する可能性が高い。SB-12と区画溝の距離は約 40 mで、SB-Aも区画溝との距離は約 40 mと推定される。

伊勢遺跡東限の大溝、及びそれから分岐して円弧状に伸びる区画溝と、円周上に配置された独立棟持柱付大型建物の位置関係について検討した結果、区画溝から約40m内側に大型建物が配置されていることがわかった。独立棟持柱建物は1間×5間で、2.5m建物から離れた位置に棟持柱を持ち、建物中心部に心柱をもつ点で共通している。しかし、SB-7など少し規模が異なる点やSB-12のように露台をもつなど全く同規模同形式ではなく、若干の個性がみうけられる。その意義は不明であるが、区画溝と建物群が同心円状に配置されている点で、伊勢遺跡形成に円形配置の計画軸があったと考えられる。

2 落込みSX-1と方形区画

92 次調査では南北方向に伸びる区画溝の一部が検出された。67 次調査でその延長部分が検出されており、南北方向に伸びる区画溝を復元することができる。この溝は96・98 次調査地点から円弧状に伸びる区画溝からT字状に分岐するものと推定される。70 m南へ伸び途切れてしまうが、その南側延長上には方形区画を構成する楼観SB-10 が位置している。SB-10 は2棟の正方形の総柱式建物が同一地点で建替えられており、伊勢遺跡中心部を構成する重要な建物であったと推定される。さらにSB



挿図 26 伊勢遺跡北東部の区画溝

- 10 の建物軸は現在の国家座標軸に正しく沿っており、方位を意識して建てられたとみられる。

識していたと考えられ、先の円形配置とは異なる遺跡構成軸があったとみられる。

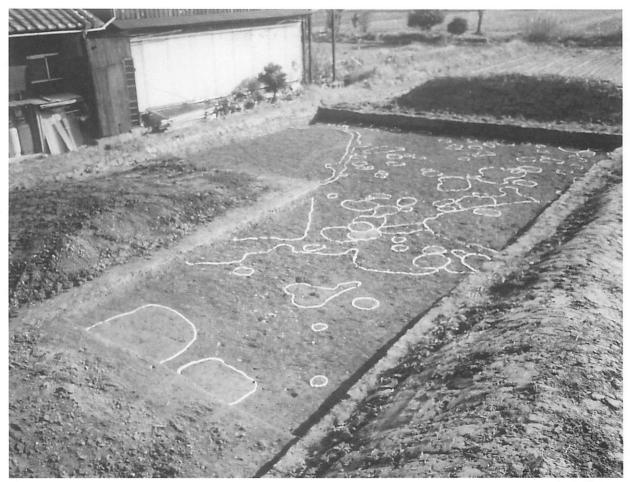
落ち込みSX-1は楼観SB-10と同じ軸線上にあり南北方向に伸びるが、伊勢遺跡東限の大溝がこれに並行する南北方向の溝である。また伊勢遺跡西端の方形周溝墓群を区画する大溝も同じである。伊勢遺跡内部に見られる南北軸の溝は、遺跡の東西端を区切る大溝と、92次調査で検出された溝SX-1がそれにあたる。伊勢遺跡中心部の方形区画及び遺跡の東西端を区切る溝は、南北方向を強く意

5 まとめ

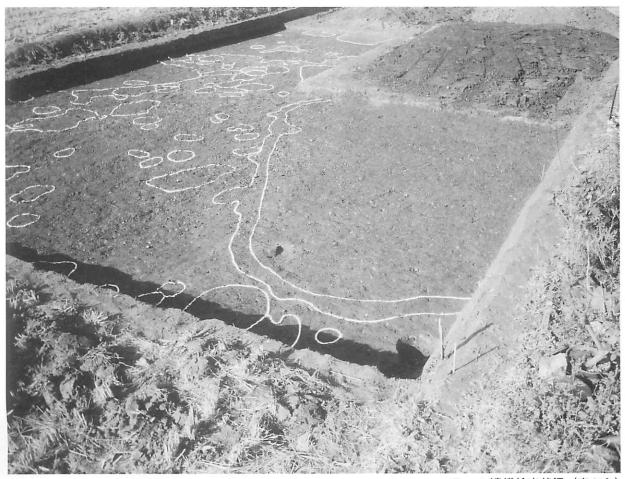
独立棟持柱付大型建物が円弧上に見つかるなかで、その延長上にトレンチを設定したものが92次調査地点であった。しかし現地調査では建物は検出されず、南北方向の大溝が検出された。96・98次調査では円弧状に伸びる区画溝が検出され、64・67次調査地点に接続することが想定された。本報告所収の調査成果として、以上2点の事実関係をあげることができる。

伊勢遺跡内部には中心部の方形区画の建物群と遺跡の東西を限る大溝、及び今回検出されたSB-10の北延長上の溝SX-1などに南北方向を強く意識した遺跡構成軸を看取することができる。その一方で、方形区画の周囲で次々と発見される独立棟持柱付大型建物群は円周を意識したもので、円弧状に伸びる区画溝の内側に規格的に配置されている。実際には正確な円周上に建物が配置されているのではなく、円弧状に伸びる区画溝に規定されているとみられるが、伊勢遺跡内部には方形とは異なる円形配置の構成軸があることは確かであろう。

中心部及び遺跡の東西端にみられる方形区画の構成軸、独立棟持柱付大型建物と区画溝にみられる円 周配置の構成軸。伊勢遺跡はこの二つの異なる遺跡構成軸によって建物が配置され、遺跡空間を分割し ているものと考えられる。



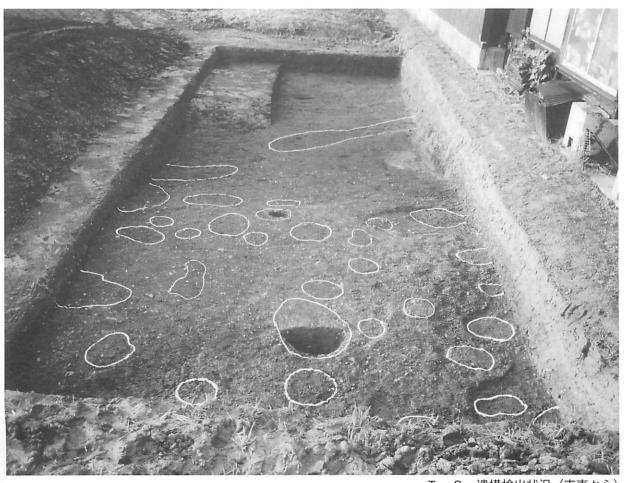
「一1遺構検出状況(西から)



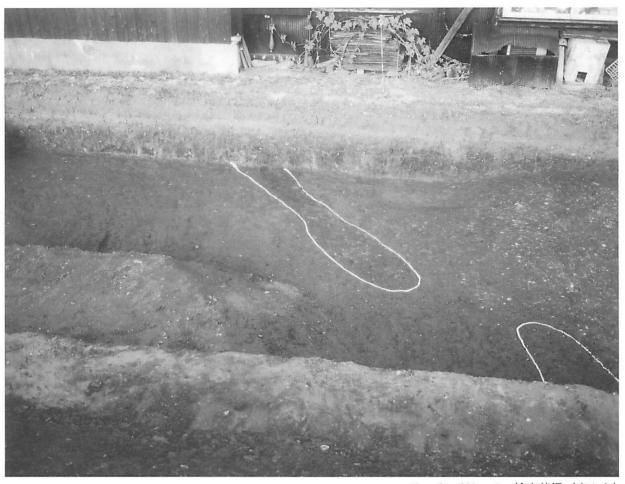
T-1遺構検出状況(東から)



T-1 SH-1 検出状況 (西から)



T-2 遺構検出状況(南東から)



T-2 SX -1 検出状況(南から)



T-2 SX-1 断面(南から)



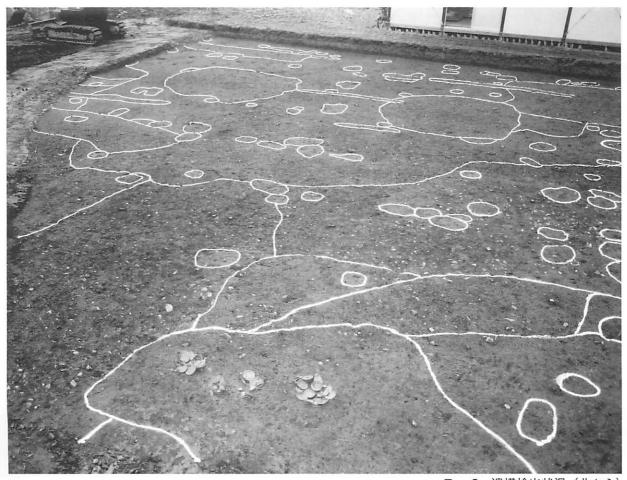
T-3 北側遺構検出状況(南東から)



T-3 SH-2 検出状況 (西から)

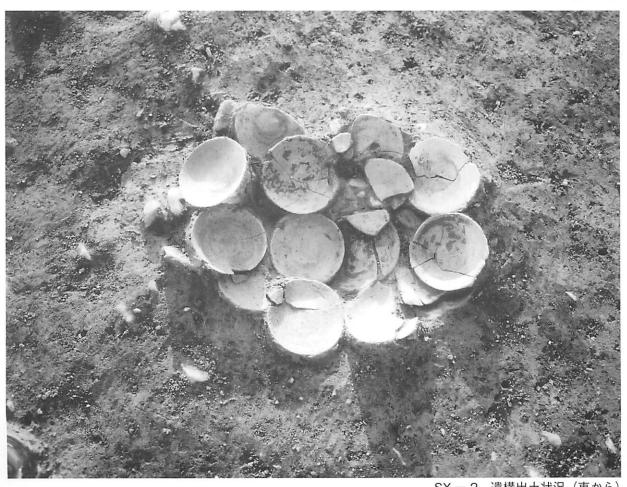


T-3 遺構検出状況(西から)



T-3 遺構検出状況(北から)





SX - 2 遺構出土状況 (東から)



T-3 遺構検出状況(南東から)



T-3 遺構検出状況(東から)



T-3 北壁拡張(西から)

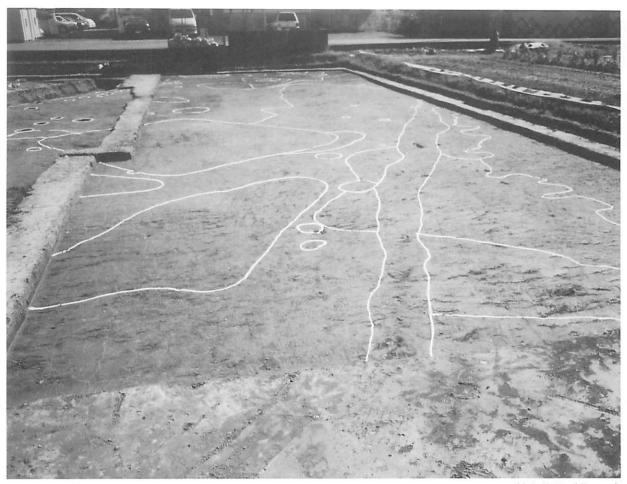


T-3 調査風景(東から)





T-2 検出状況(南東から)



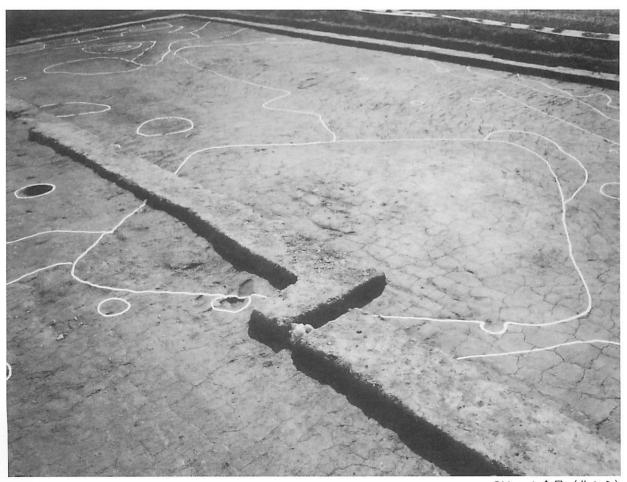
SD-1 検出状況(北から)



遺構検出状況(北西から)



SH-1 検出状況(北から)



SH - 1 全景 (北から)



遺構検出状況 (西から)



SD-1 掘削状況 (東から)







T-2 検出状況(南東から)



T-2 検出状況 (南西から)



T-1 遺構検出状況(北西から)



T-1 SH-1 検出状況 (西から)



T-2 遺構検出状況(南から)



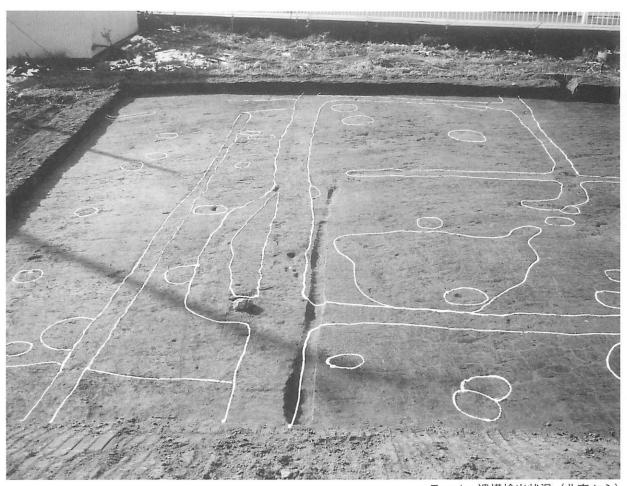
T-2 遺構検出状況 (北西から)



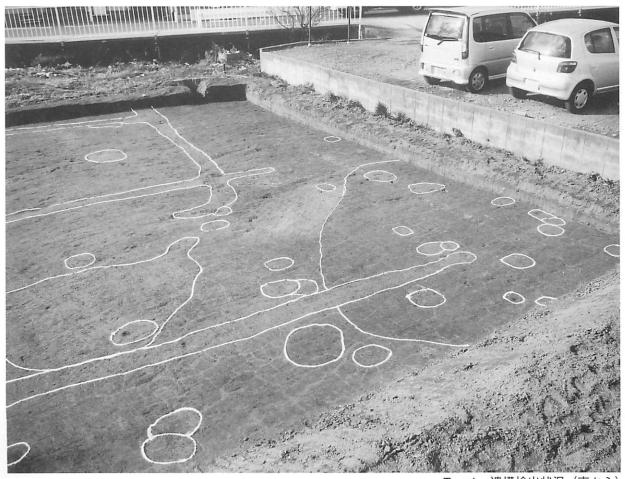
T-2 遺構検出状況(北西から)



断面状況 (北から)



T-1 遺構検出状況(北東から)



T-1 遺構検出状況(東から)



T-2 遺構検出状況(北東から)



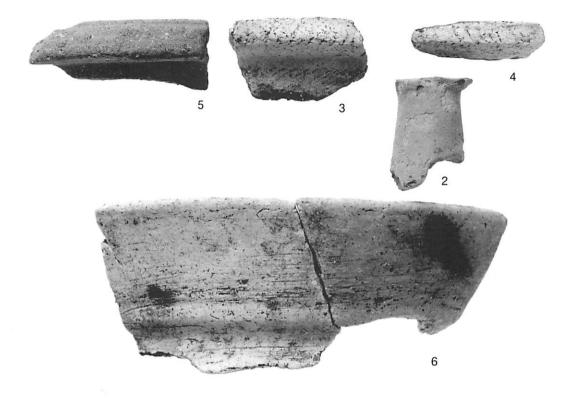
T-2 遺構検出状況 (東から)

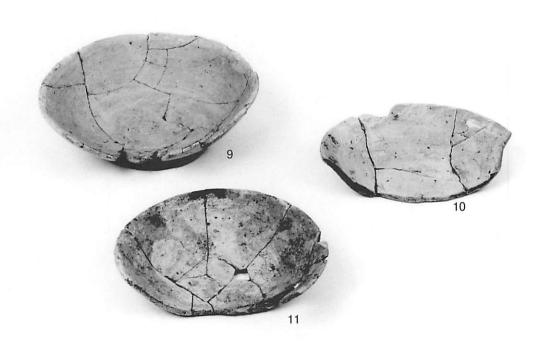


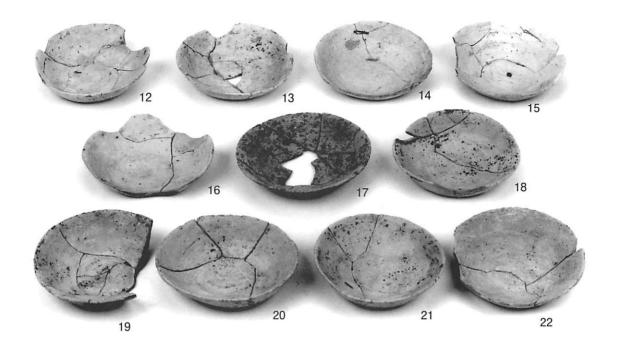
T-2 遺構検出状況(南から)

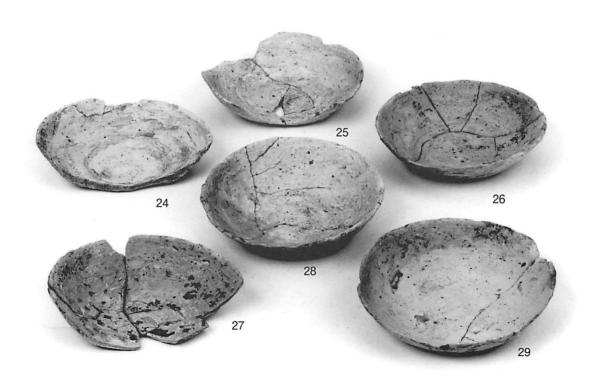


SH-1 検出状況 (北から)

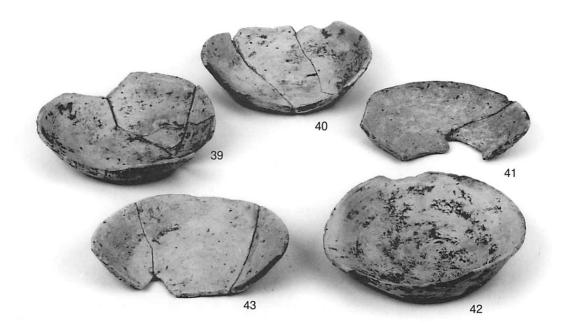


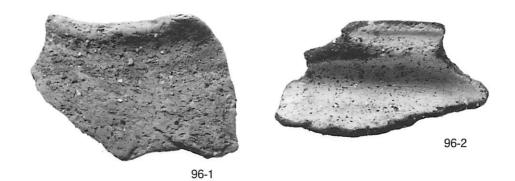




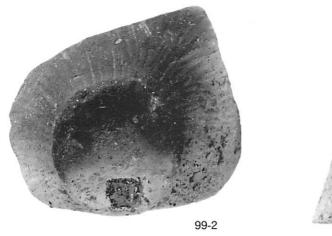












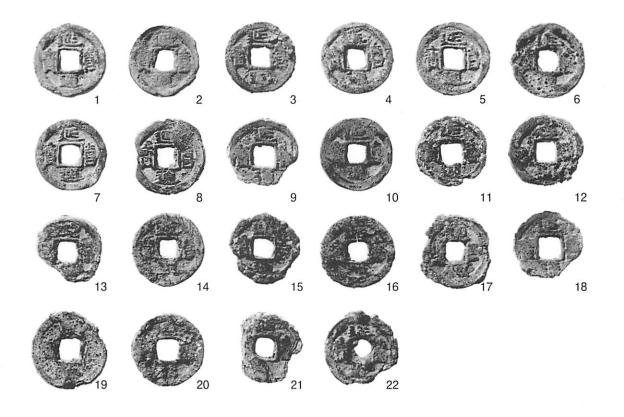


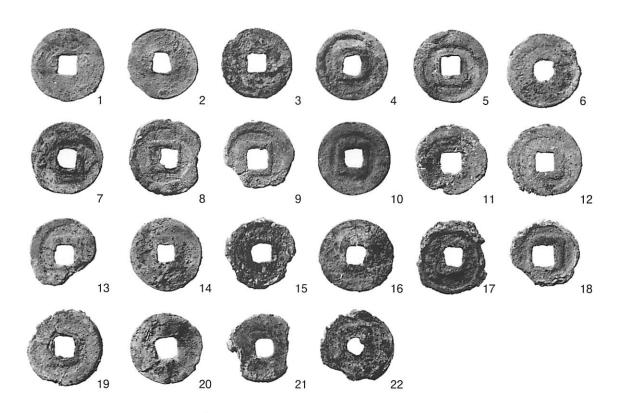




96-4







報告書抄録

ふりがな	いせいせきかくにんちょうさほうこくしょV									
書 名	伊勢遺跡確認調査報告V									
副	守山市文化財調査報告書									
シリーズ名	守山市文化財調査報告書									
編集者名	守山市教育委員会 伴野幸一									
編集機関	守山市教育委員会									
所 在 地	〒 524-0021 滋賀県守山市吉身二丁目 5 番 22 号 TEL 077 - 582 - 1156									
発行年月日	西暦 2007年3月25日									
ふりがな	ふりがな	コー	- ド	北緯		Ė	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	0	,	"	0 / #		m²	
伊勢遺跡 92 次	守山市伊勢町	207	045	35	2	26	135 59 18	平成 15 年 11 月~2月	400	確認調査
伊勢遺跡 94 次	守山市伊勢町	207	045	35	2	19	135 59 14	平成16年 5月	200	共同住宅
伊勢遺跡 96 次	守山市阿村町	207	045	35	2	25	135 59 23	平成 16 年 10 月~ 11 月	600	宅地造成
伊勢遺跡 97 次	守山市伊勢町	207	045	35	2	21	135 59 11	平成 17 年 5月	200	個人住宅
伊勢遺跡 98 次	守山市阿村町	207	045	35	2	25	135 59 23	平成 17 年 8月~9月	500	分譲住宅
伊勢遺跡 99 次	守山市伊勢町	207	045	35	2	31	135 59 6	平成 17年 12月~ 平成 18年1月	200	共同住宅
所収遺跡名	種別	主な	主な遺構				主な遺物		特記事項	
伊勢遺跡	集落	弥生 後	土壙・柱穴・溝 竪穴住居				弥生土器・土師器 銅銭			

伊勢遺跡確認調査報告書V

守山市文化財調査報告書

発 行 日 平成19年(2007)3月

編集・発行 守山市教育委員会

滋賀県守山市吉身二丁目5番22号

印 刷 株式会社スマイ印刷工業

滋賀県栗東市川辺 568 番地 2